

和歌山大学所蔵の伝岩橋千塚古墳群 出土品について (3)

—伝土手形塚出土の馬具及び鉄刀、銀象嵌大刀、鉄鏃、
胡籙金具、両頭金具、その他鉄製品—

石丸 彩・金澤 舞・瀬谷今日子・中西瑠花・
富永里菜・仲原知之・馬場彩加

はじめに

和歌山大学には様々な経緯で集められた伝岩橋千塚古墳群出土品が存在する。筆者らはその報告・検討を進めており、本稿は3部目にあたる¹⁾。本稿では、伝土手形塚出土の馬具及び鉄刀、銀象嵌大刀、鉄鏃、胡籙金具、両頭金具、その他鉄製品について報告・検討を行った²⁾。

1. 馬 具

馬具は破片数52点(鞍の磯金具7点、鞍2点、革帯を留める辻金具15点、革帯金具類6点、鏡吊金具5点、鉸具5点、その他12点)である。馬の口に装着する轡や革帯から吊下げる装飾である杏葉の存在は確認できない。馬具の組成としては断片的であるが、個々の資料は全容がわかる程度に残存状況は良く、皮革等の有機質が付着して残存する。磯金具(図2-1~7) 鞍橋の座面を構成する居木の両端に前輪・後輪を連結し、その下部の磯と呼ばれる部分を飾る金具である。

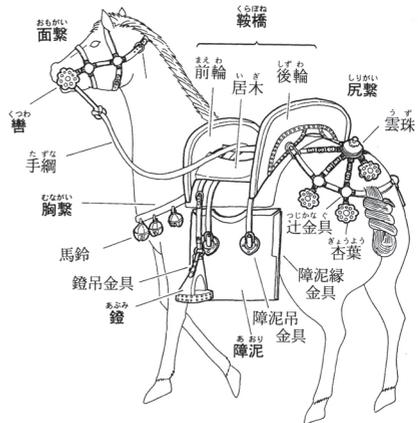


図1 馬具の部位名称

1～7とも接合しないが同様の造りであるため、同一の鞍の磯金具と考えられる。平面形が円弧状の板面の縁辺に縁金を配し、縁金上から鉸を打ち込んで鞍橋の木部に留める。板面、縁金とも鉄地金銅張りで、裏面には黒色の漆とみられる被膜と木質が付着して残り、縁に織布の痕跡がみえる(写真1)。縁金幅は0.6cm、厚さ0.2cm、鉸頭の直径0.9cm、高さ0.2cm。

各破片の形状から復元すると、磯金具片側の幅約20cm、高さ約15cm程度となる。後輪とするにはやや小さく、また後輪に付属する例が多い鞍が接合する箇所がみられないことから、前輪の可能性はある。全体像としては、黒漆塗の木製の前輪に金銅装の磯金具が装着された鞍が想定できる。磯と州浜形を別造りにし、磯金具に幅の狭い縁金を使用する系列の下限(TK43型式期)まで(宮代 1996a)、磯金具の板面に突起を設ける形状ではないためその出現前(MT85型式期)に相当すると考えられる(花谷 1996)。

鞍(図2-8・9) 鞍を馬体に装着する尻繫の革帯を繋ぐ留め金である。8・9は同形状であり、同一の鞍に付属するとみられる。革帯を通すための輪金、輪金の基部に接合したT字形の刺金、輪金を鞍橋の木部に固定する座金具、輪金の基部に接合し木部に貫通する脚部からなる。輪金の幅5.1cm、長さ4.8cm、刺金の幅1.3cm、長さ4.0cm。座金具は、直径3.3cmの扁平な円形で縁に小さな鉸が0.6cm間隔で並び、裏面には黒色の漆とみられる被膜が付着する。脚部の全長6.2cmで木質が付着し、鉤状に屈曲する先端の外面には黒色の漆とみられる被膜が付着するため、鞍橋の木部の厚さ5.1cmと推定できる。

8・9からは、黒漆塗の木製の後輪に磯金具を伴わずに鉄製の鞍が付属する鞍が想定でき、T字形の刺金をもつ型式の下限であるMT85型式期までに相当する(宮代 1996a)。また前述1～7の金銅装の磯金具を伴う前輪とは異なるため、鞍が複数存在した可能性がある。

辻金具(図3・4-10～24) 革帯の交点を固定する辻金具は3種類ある。

A類(10・11)は鉄地金銅張りで、やや扁平な半球形の鉢部に、透かし文様を施す点が特徴的である。透かし文様は、2辺が内湾する三角形状で、4か所に放射状に配置する。脚部は、爪形で責金具2条と1鉸を伴い、直交する4方向に配置する。責金具は、銀被せで斜行する刻み目がある。鉢部は直径4.0～4.4cm、高さ1.4cm、脚部の幅2.0cm、長さ1.8cm、鉸頭の直径0.6cm、高

さ0.2cm、責金具1条の幅0.3cm。革帯幅は2.0cmでやや幅広く、革帯を織布で巻いて縁に組紐状の装飾を付ける(写真2)。12~17は同様の爪形の脚部の破片で、10・11と接合しないが同一個体の可能性があり、また脚部の破片が多いため、同種の辻金具が3個体以上あった可能性がある。辻金具A類のように、鉄地金銅張りの鉢部に透かし文様を施す例は管見の限り見当たらないが、鉢部に象嵌模様を施す例に近いとするとTK10~MT85型式期から(宮代 1996a)、刻み目のある責金具や縁飾付織物繫の下限であるTK43型式期までと考えられる(片山 2017)。

B類(18・19・20)は、半球形で無稜の鉢部の頂点に大型の鉞と座金具が付属し、やや小型で爪形の脚部を×字状に4方向に配置し、脚部は責金具1条と1鉞を伴う。鉢部は直径3.6~3.8cm、高さ1.2cm、脚部の幅1.3cm、長さ1.5cm、鉞頭の直径0.5cm、高さ0.15cm、責金具幅0.3cm。責金具に刻み目はみられない。革帯幅1.4cmでA類より幅が狭い。鉢部が無稜半球形で脚部が爪形1鉞の形式はMT85~TK43型式期に相当し、それ以降に頂部に鉞を伴う例が増えるため、B類はTK43型式期を中心とする時期と考えられる(宮代 1996a)。

C類(21・22)は、鉢部が小型で扁平な半球形で、爪形の脚部を×字状に4方向に配置し、脚部は責金具1条と1鉞を伴う。鉢部は直径2.0cm、高さ0.7cm、脚部の幅1.2cm、長さ1.2cm、鉞頭の直径0.5cm、高さ0.15cm、責金具幅0.3cm。革帯幅は1.3cmで、B類に近いが最も幅が狭い。

革帯金具類(図5-25~30) 轡、杏葉等を繫の革帯に固定、または革帯を装飾する金具類で、3種類に分類できる。

a類(25・26)は鉄地金銅張り、長方形5鉞で、幅1.8cm、長さ3.3cm、鉞頭の直径0.4cm、高0.15cm。革帯幅は2.0cmで、革帯を織布で巻いて縁に組紐状の装飾を付け、革帯端部の繫ぎ目がある(写真2)。26は責金具が付属し、銀被せで斜行する刻み目がある。辻金具A類の責金具、革帯幅と同様であり、組み合わせて使用した可能性がある。

b類(27・28・29)は鉄地金銅張り、方形4鉞で、幅2.3cm、長さ2.2cm、鉞頭の直径0.5cm、高0.2cm。鉞頭は銀被せで花形の刻み目がある。革帯幅2.0cmで後述41の環状金具と組み合わせて使用したならば、環状雲珠・辻金具の下

限の6世紀中葉までに相当し、花形の刻みがある銚の下限とも一致する(宮代 1996a)。

c類(30)は鉄地金銅張り、長方形10銚で、幅2.0cm、長さ4.0cm以上、銚頭の直径0.4cm、高さ0.15cm。革帯幅は2.0cmで辻金具A類、革帯金具a・b類と等しい。金銅装の轡・杏葉の鉤吊金具で、欠損する下端が本来鉤状と考えられる。この種は中期から後期にかけて存在するが(片山 2017)、8銚以上の類例でみるとf字形鏡板付轡と消長を共にしTK43型式期までの可能性がある。**鏡吊金具**(図5-31~35) 木製の鏡を鞍から吊り下げる金具で、やや内湾する細長い鉄板に一定間隔で銚を打ち込む形状である。31~35は接合しないが、同じ造りであるため一対の鏡と考えられる。幅1.8cmで、破片を総合すると片側の長さ10cm以上、6銚以上である。銚頭の直径0.4cm、高さ0.1cmで、銚の脚部に木質が残る。木芯金属張り三角錐形壺鏡の系列で6世紀中葉に相当する(斎藤 1986)。

鉸 具(図6-36~40) 革帯の留め金である鉸具は3種類ある。

I類(36・37)はやや小型で、輪金の基部に帯状の鉄板を巻き付け、鉄板で革帯を挟み1銚・責金具1条で留める形状である。輪金の幅2.9cm、長さ3.3cm、鉄板の幅1.5cm、長さ2.4cm、責金具の幅0.3cm、銚頭の直径1.0cm。

II類(38)は輪金の基部に棒状の刺金を接合する構造で、輪金の幅3.4cm、長さ5.1cm。I・II類は革帯幅1.5cmで、面繫か尻繫に用いると考えられる。

III類(39・40)は、輪金の幅5.0cm、長さ6.3cm、革帯幅2.0cm。やや大型であるため、鞍を馬体に固定する腹帯や、鏡を吊る革帯に使用した可能性がある。

その他(図6-41~52) 41の環状金具は、3~4方向に皮革が付着するため、雲珠・辻金具の可能性はある。革帯幅1.5cm。42・43は同じく環状の金具であるが、幅が広く薄いため用途は不明。44~48は屈曲する棒状の金具で、鉸具・轡・鏡等の一部の可能性はある。49は笠形の金具で銚等はない。50・51は、平面形の一辺が円弧状を成す鉄板で、轡の鏡板や杏葉の地板等の可能性がある。52は木質が付着する鉄板で、馬具か刀子等の可能性がある。

位置づけ 本資料を、岩橋千塚古墳群内の一つの古墳から出土したものと仮定して、馬具の組成からみた位置付けを検討したい。断片的ではあるが、編

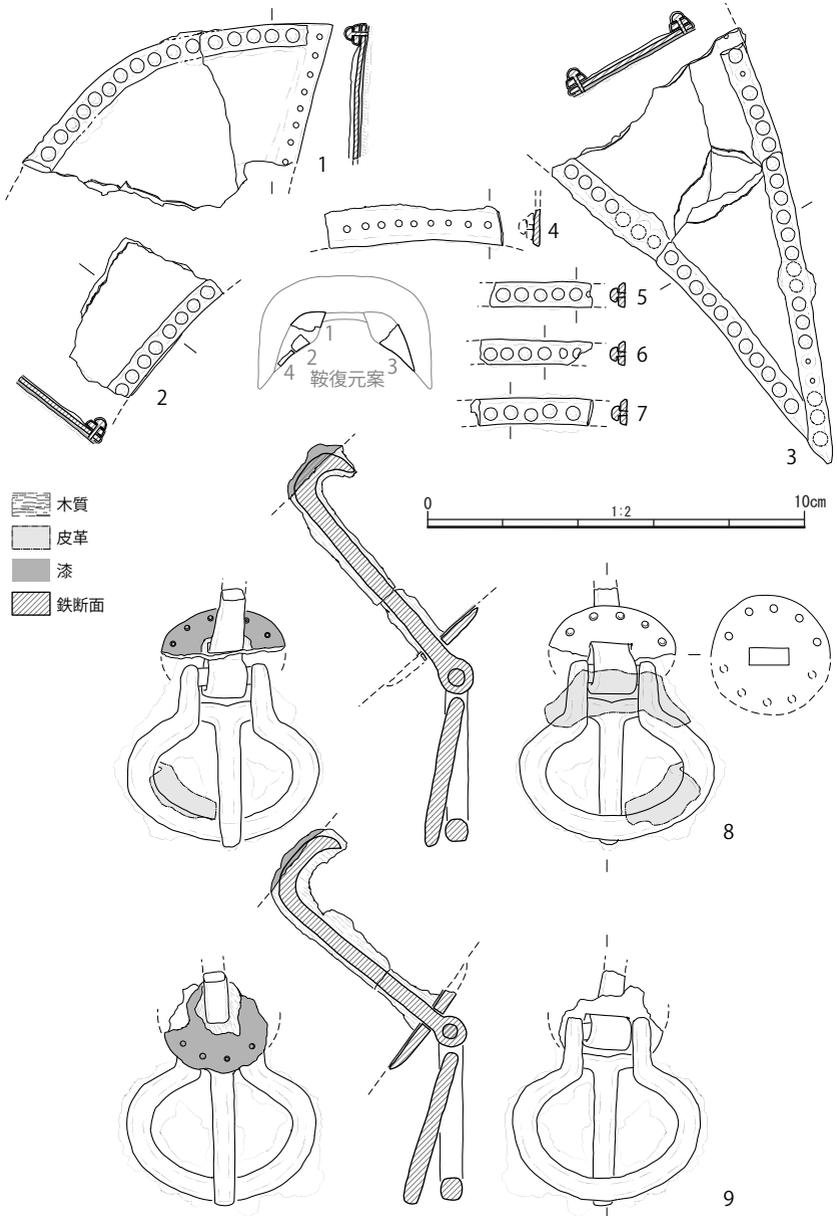


図2 馬具 鞍磯金具(1~7)・鞍(8・9)(S=1/2)

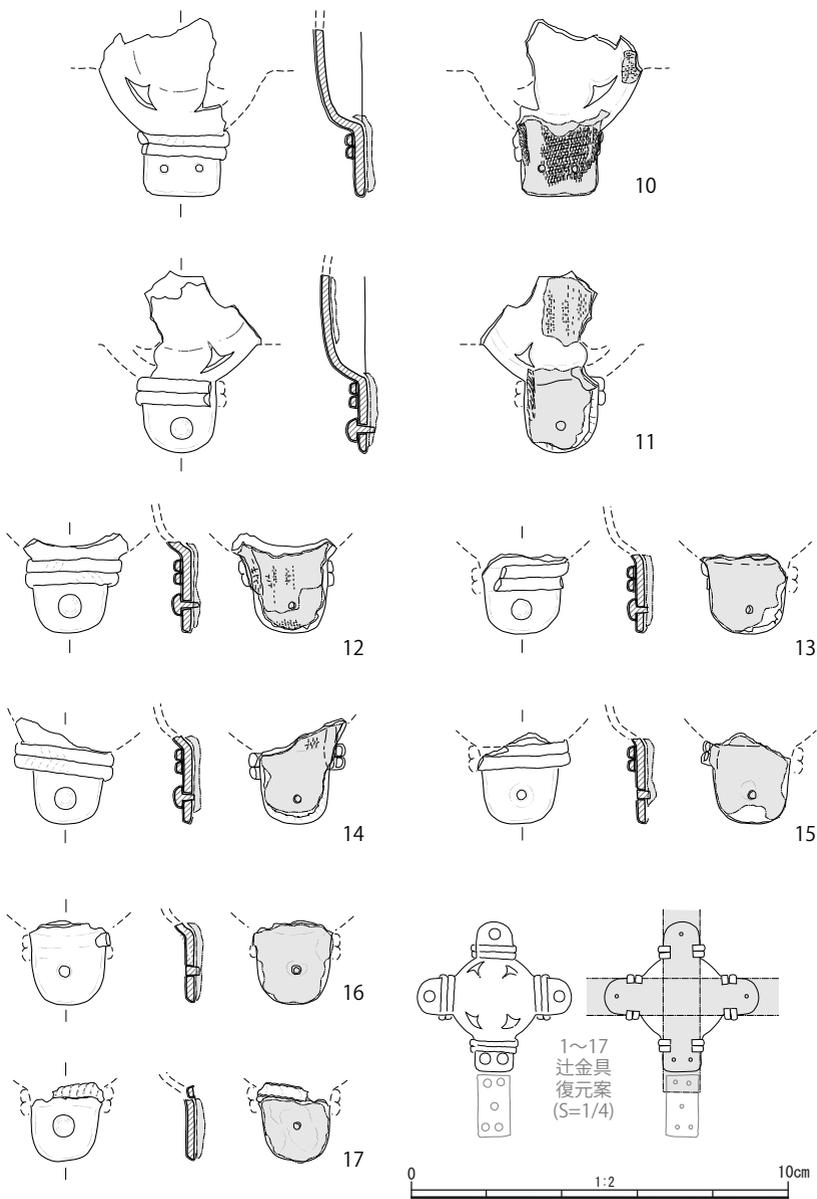


图3 馬具 辻金具(10~17) (S=1/2)

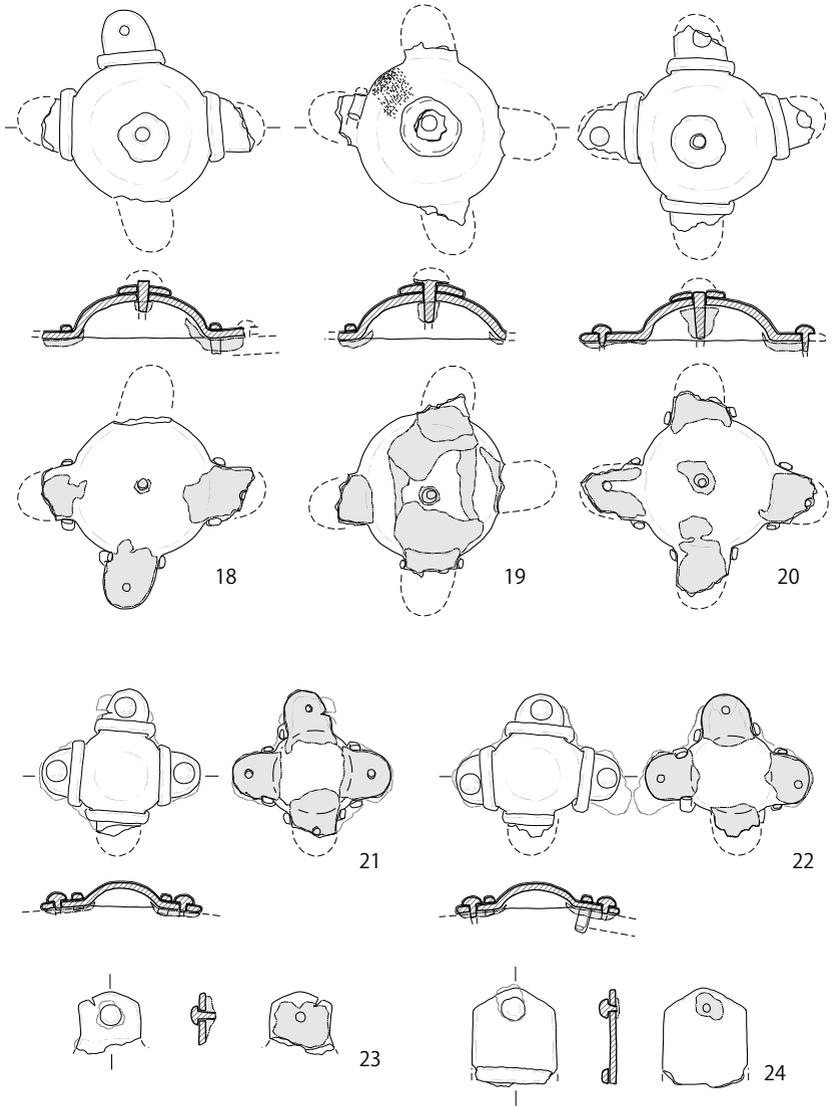


図4 馬具 辻金具(18~24) (S=1/2)

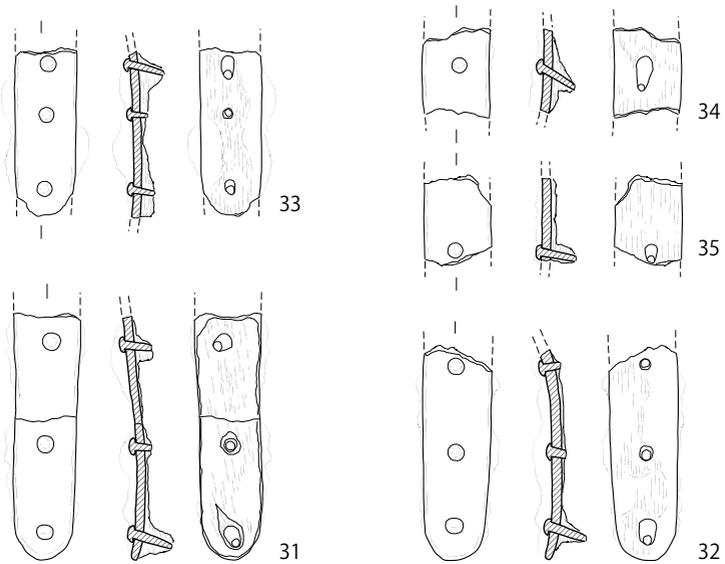
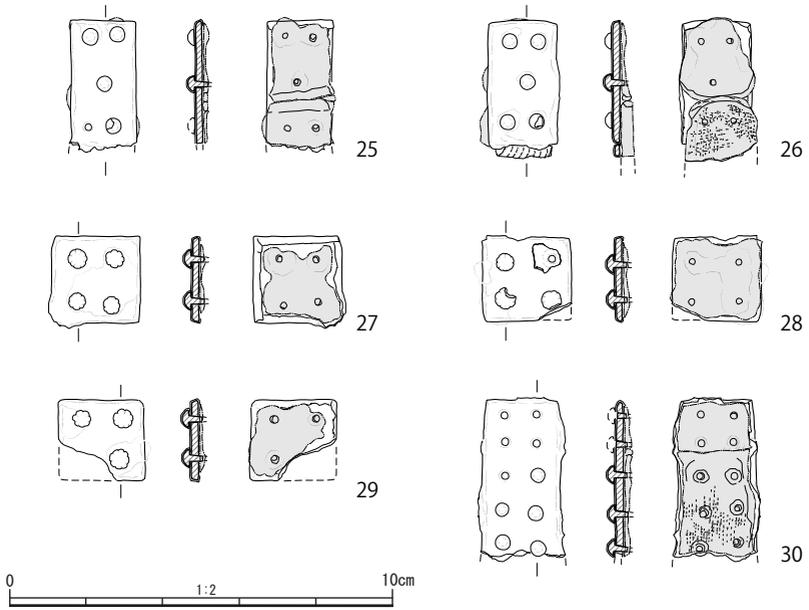


图5 马具 革带金具(25~30)・鍔吊金具(31~35)(S=1/2)

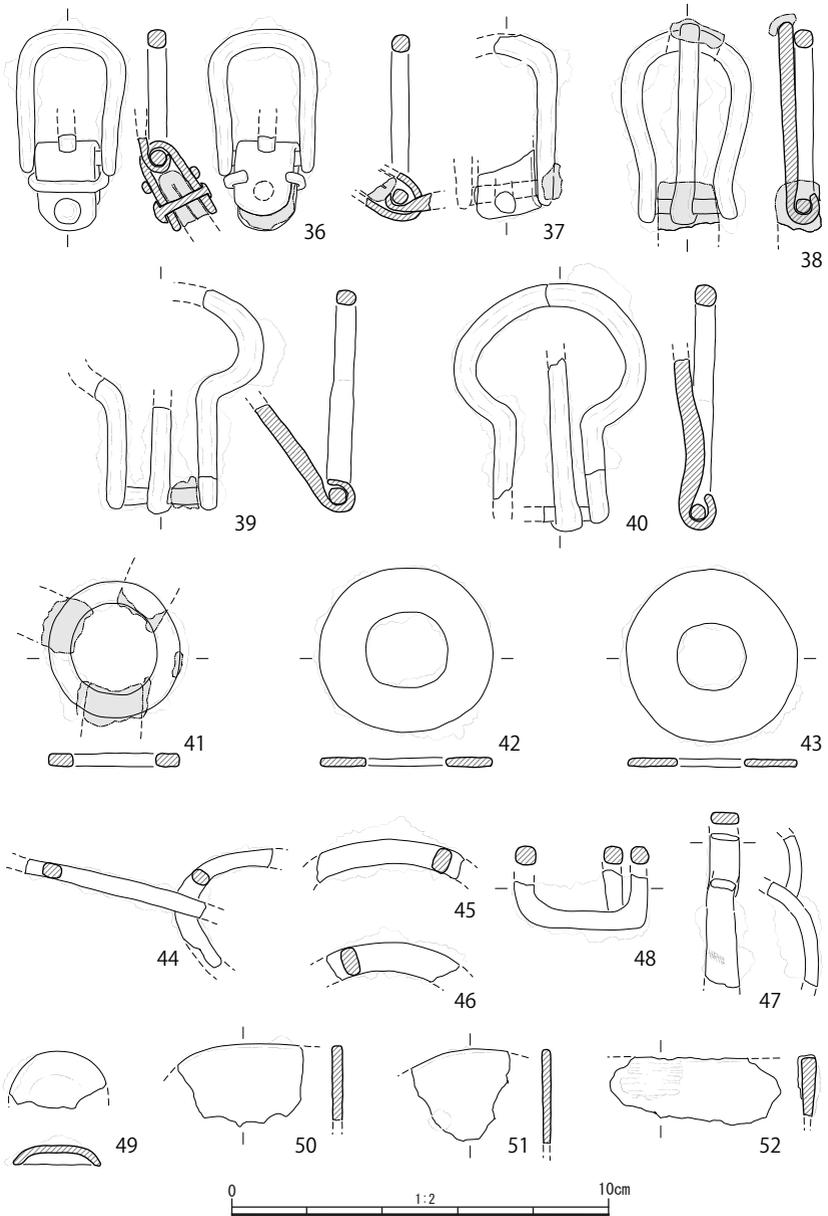


図6 馬具 銜具(36~40)・その他(41~52)(S=1/2)

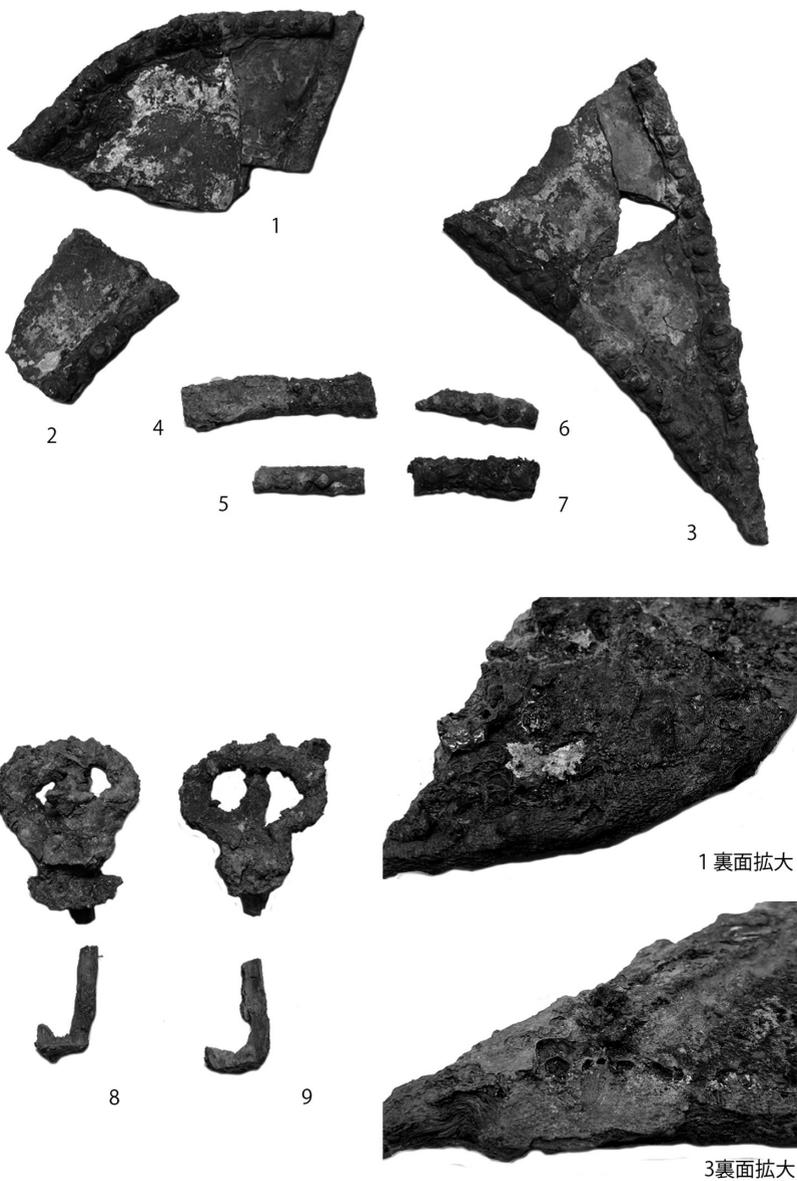


写真1 馬具 鞍磯金具(1~7)・鞍(8・9)(縮尺不同)

和歌山大学所蔵の伝岩橋千塚古墳群出土品について (3)

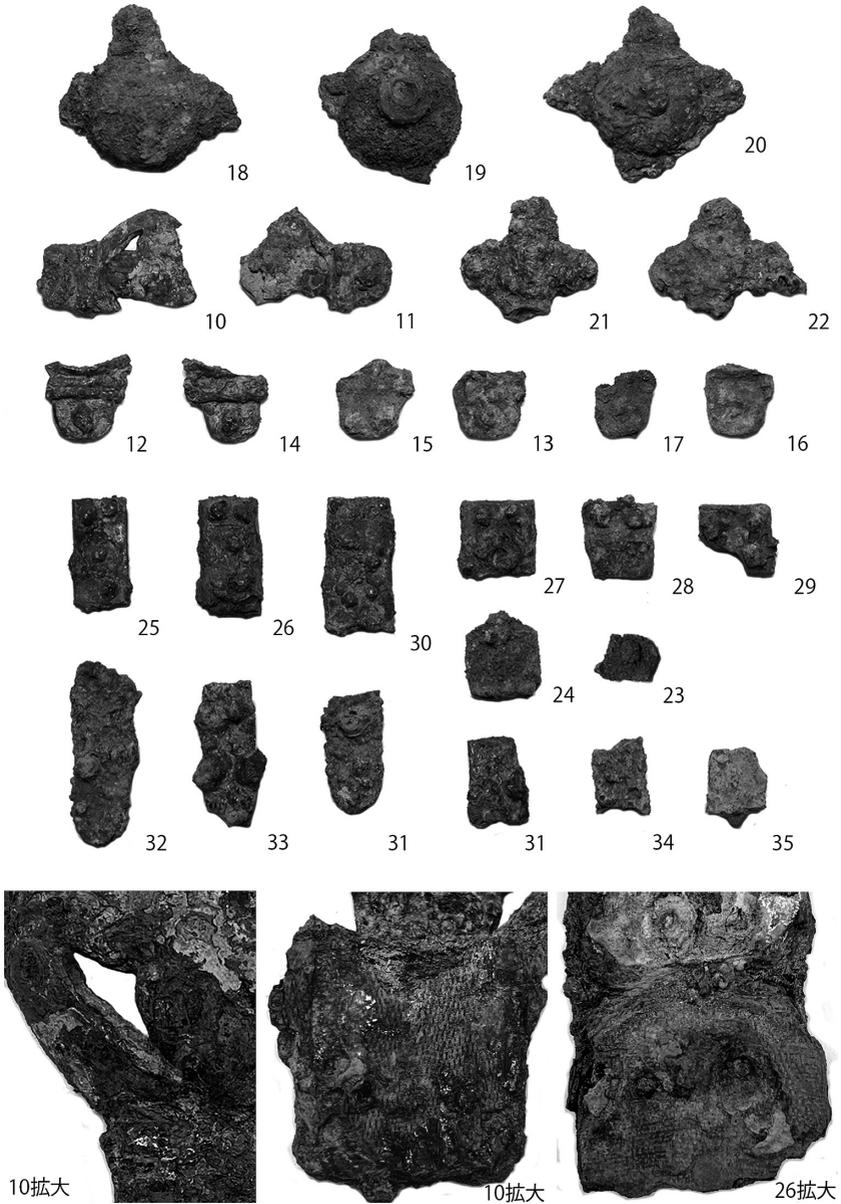


写真2 馬具 辻金具(10~24)・革帯金具(25~30)・鍔吊金具(31~35) (縮尺不同)



写真3 馬具 絞具(36~40)・その他(41~52)(縮尺不同)

年的には概ね6世紀中葉前後と考えられる。金銅装の轡や杏葉が存在しないため位置付けが難しいが、本資料中の金銅装の鞍や、金銅装の辻金具・革帯金具の存在は、本来は金銅装の轡や杏葉に伴って出土する例が多い構成であり、本資料も装飾的な馬装の一群とみなすことができる。さらに、鞍金具や辻金具の様相からは、複数組の馬装の可能性も示唆され、多様性に富む内容であることから、上位の古墳の副葬品と捉えてよいだろう。

岩橋千塚古墳群では、花山6号墳、大谷山22号墳、大日山35号墳、井辺前山6号墳、天王塚古墳といった各時期最大級の前方後円墳、つまり首長墓で金銅装馬具が出土し、また花山32号墳、井辺前山36号墳、前山A58号墳等の中規模の古墳で鉄製馬具が出土している(瀬谷 2016)。また6世紀後半になると山東22号墳や、紀の川北岸の鳴滝1号墳、園部円山古墳等の大型の円墳で装飾大刀等の豪華な副葬品をもつ例が出現する。本資料はその過渡期にあたるが、馬具の様相からは、新しく現れる系列はなく前代からの要素を引き継いだ系列が多いように感じる。

2. 鉄 刀

鉄刀片は11点ある(図7・写真4)。いずれも破片で、表面の剝離や欠損、銹化のため遺存状態は悪い。4~11は身部片で、残存部の幅は3.1cm~3.4cmである。残存部分の観察から、断面形状は三角形となる。角棟で、鑄がみられないことから平造りとみられる。1は関部である。身部幅は3.1cm、茎部幅は2.3cmをはかる。関の形状は片関で、直角関と推測される。3は茎部(柄部)で、幅は2.4cmである。2は切先片の可能性があり、形状や法量等から、破片はいずれも同一個体である可能性が考えられる。

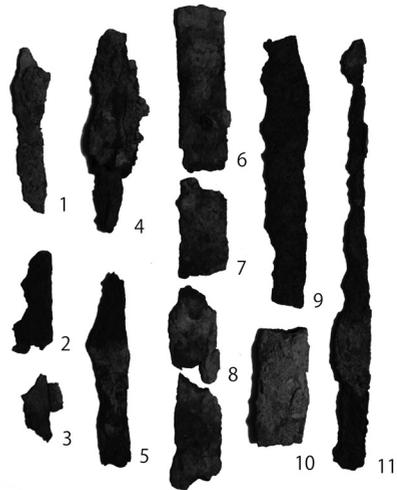


写真4 鉄刀(1~11)

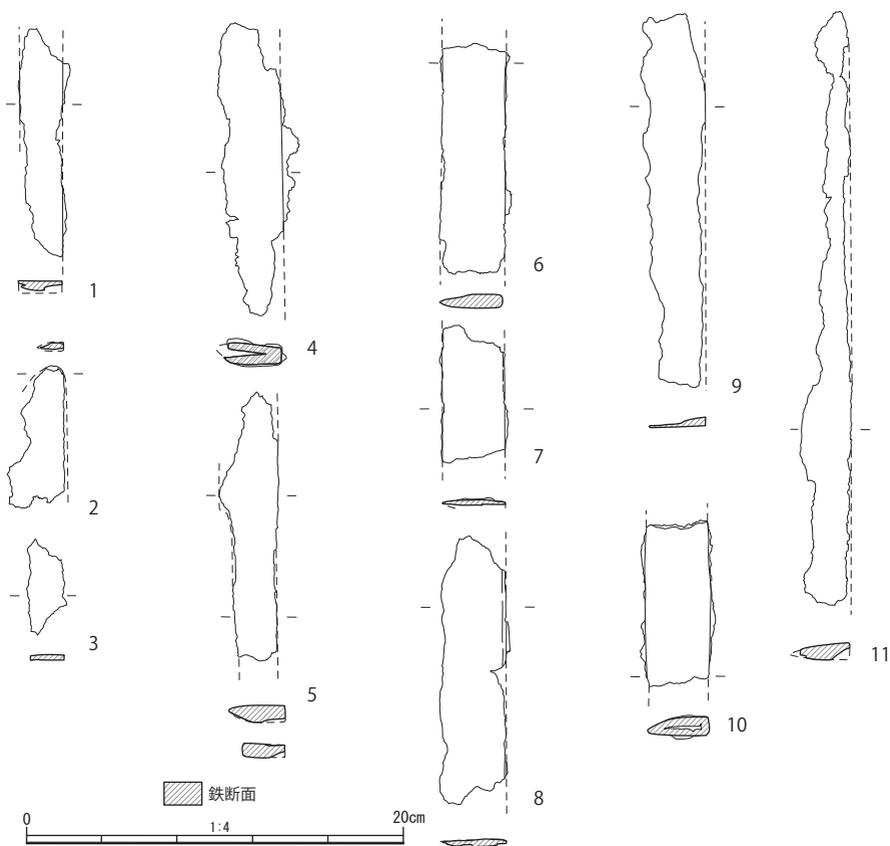


図7 鉄刀(1~11)(S=1/4)

位置づけ 岩橋千塚古墳群における刀剣類の副葬事例は、4世紀末から5世紀末にかけて、鉄剣が副葬の中心となるが、6世紀以降は鉄剣の副葬が見られなくなり、鉄刀の副葬事例が増加する。鉄刀の副葬は、5世紀前半からわずかに確認されるものの、大多数が6世紀以降の事例である。

3. 銀象嵌大刀

今回整理した鉄製品のX線撮影の結果、1点の鉄片に銀象嵌文様を確認した³⁾。

伝岩橋千塚古墳群出土品の連弧状輪状文は、輪状部分の内円の径が外円の径に近く、連弧状文は一重である。残存部分の特徴から、静岡県宇洞ヶ谷出土品(6世紀前半)、奈良県新沢千塚327号墳出土品(6世紀中葉)と類似する。位置づけ 当該資料は、形状等の特徴と、象嵌文様の事例から、鉄刀の刀身部分の破片である可能性が極めて高い。また、文様の特徴から6世紀初頭から中頃の事例と類似していることが指摘できる。

連弧輪状文の象嵌文様が施された鉄刀は、江田船山古墳をはじめ、番塚古墳、王墓山古墳、綿貫観音山古墳、藤ノ木古墳などの各地の首長墓や有力層の墓から出土している。

表1 連弧輪状文の象嵌資料 一覧

器種(部位)	出土古墳名	所在地	遺構	規模	共存遺物
1 鉄刀(刀身)	八幡横穴第23号	福島県いわき市	横穴墓	—	鉄刀、鉄鏃、刀子、弓金具、胡鏃、挂甲、馬具、斧、玉類、骨製品
2 鉄刀(刀身)	陸軍省火薬製造所構内	群馬県高崎市	古墳	—	鉄刀、鉄鏃、挂甲、馬具、鈴
3 鉄刀(刀身)	—	群馬県高崎市	—	—	鉄刀、頭椎大刀、圭頭大刀、鈴、玉類、須恵器
4 鉄刀(刀身)	綿貫観音山古墳	群馬県高崎市	前方後円墳	97m	三繫頭大刀、頭椎大刀、鉄刀、刀子、鉾、石突、鉄鏃、甲冑、馬具、鏡、大帯、耳環、玉類、飾金具、水瓶、須恵器、土師器
5 鉄刀(刀身)	筑波山古墳	群馬県板倉町	前方後円墳	55m	鉄鏃、馬具、耳環、玉類
6 鉄刀(刀身)	久米田古墳群(姫塚古墳?)	埼玉県吉見町	円墳	—	鉄刀、馬具
7 鉄刀(刀身)	青柳古墳群南塚支群10号墳	埼玉県神川町	円墳	19m	大刀、鉄鏃、弓金具、刀子、耳環、玉類
8 鉄刀(刀身)	宇洞ヶ谷横穴墳	静岡県掛川市	横穴墳	—	単竜式環頭大刀、頭椎大刀、直刀、鉾、鉄鏃、刀子、馬具、土師器、須恵器、変形四神四獣鏡、玉類
9 鉄刀(刀身)	いわき塚古墳	愛知県大口町	古墳	—	鉄刀、鉄鏃、鉾、石突、刀子、鏡、須恵器
10 鉄刀(刀身)	琴平山古墳	三重県名張市	前方後円墳	70m	鉄刀、劍、甲冑、須恵器
11 鉄刀(刀身)	石塚谷古墳	三重県多気郡多気町	円墳	30m	鉄刀、鉄鏃、鉄斧、刀子、馬具、玉類、須恵器
12 鉄刀(刀身)	百舌島大塚山古墳	大阪府堺市	前方後円墳	168m	鉄刀、鉄劍、鉄鉏、鉾、甲冑、刀子、鉾、斧、鎌、鋸、鏡、玉、櫛
13 鉄刀(刀身)	峯ヶ塚古墳	大阪府羽曳野市	前方後円墳	96m	鉄刀、魚脩、鉄鏃、弓金具、盛矢具、甲冑、盾、馬具、鈇、鉾、刀子、鏡、冠帽、耳飾、飾金具、玉類、須恵器、土師器
14 鉄刀(刀身)	新沢千塚327号墳	奈良県橿原市	方墳	21m	鉄刀、鉄鏃、刀子、鎌、須恵器、皮製短甲等
15 鉄刀(刀身)	鳥土塚古墳	奈良県平群町	前方後円墳	60m	鉄刀、鉄鉾、鉄鋸、鉾、銅鏡等
16 鉄刀(刀身)	藤ノ木古墳	奈良県斑鳩町	円墳	48m	飾大刀、冠、飾履、馬具、金銅製筒形器、鏡、玉類 等
17 鉄刀(刀身)	奥山B-II号横穴	鳥取県松江市	横穴墓	—	鉄刀、須恵器
18 鉄刀(刀身)	上塩冶築山古墳	高根県出雲市	円墳	43m	大刀、鉄鉾、石突、鉄鏃、刀子、斧、馬具、冠、耳環、玉類、須恵器
19 鉄刀(刀身)	王墓山古墳	香川県善通寺市	前方後円墳	45m	鉄刀、鉄鏃、甲冑、馬具、冠帽、石製模造品、砥石、耳環、須恵器、土師器
20 鉄刀(刀身)	番塚古墳	福岡県岡田町	前方後円墳	40m	鉄刀、鉄鉾、石突、鉄鏃、鉄斧、刀子、鉾、甲冑、釘、飾金具、耳環、玉類、須恵器、土師器
21 鉄刀(刀身)	江田船山古墳	熊本県和水町	前方後円墳	61m	素環頭大刀、鉄鉏、鉄刀、鉾、鉄鏃、馬具、甲冑、冠帽、冠、飾履、耳飾、耳環、帯金具、飾金具、玉類、鏡、須恵器
22 鉄刀(刀身)	島内114号地下式横穴墓	宮崎県えびの市	地下式横穴墓	—	銀装大刀、鉄劍、鉄鏃、刀子、鉾、玉類
23 鍛冶具(鉄鉏)	島内139号地下式横穴墓	宮崎県えびの市	地下式横穴墓	—	大刀、鉄劍、鉄槍、甲冑、鉄鏃、弓、胡鏃、馬具、鏡、小刀、象嵌鍛冶具

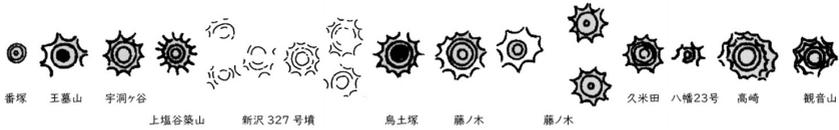


図9 象嵌類例



写真5 象嵌大刀片

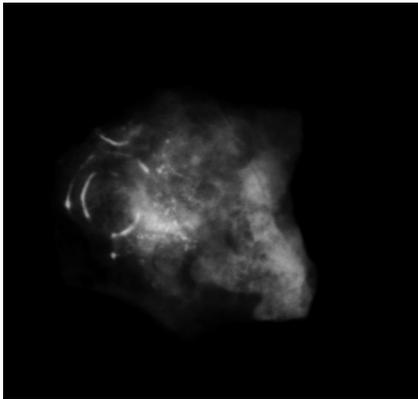


写真6 象嵌大刀片レントゲン

和歌山県内で確認されている象嵌資料は、和歌山市の山東22号墳と奥山田古墳出土品⁴⁾の現在2例のみで、いずれも鉄刀刀装具に施されている。このうち岩橋千塚古墳群内の山東22号墳は、岩橋千塚古墳群の南東エリアの山東地区の南端に位置する6世紀後半の直径26~28mの円墳である。大型の岩橋型横穴式石室からは、銀象嵌鐙のほか、金銅装馬具、玉類、冠片の可能性のある金製品、耳環、鉄鏃、弓金具、鉄鉾、須恵器等の出土がみられ、石室の規模や副葬品の内容から首長墓に次ぐ有力者の墓と考えられている。当該資料は、これに続く岩橋千塚古墳群で2例目の象嵌事例である⁵⁾。

銀象嵌大刀は、ヤマト政権から各地の首長に下賜されたと考えられている器物である。岩橋千塚古墳群では、銀象嵌大刀と同様にヤマト政権から下賜され、所有者の身分や地位を表象する役割があるとされる装飾付大刀についても、これまで首長墓からの出土が確認されていない。一方で、紀の川北岸に位置する鳴滝1号墳や園部円山古墳では装飾付大刀が出土し、岩橋千塚古墳群の東方に位置する奥山田古墳か

らは銀象嵌の刀装具をもつ大刀が出土している。こうしたあり方が、岩橋千塚古墳群において単に盗掘等による副葬品の遺存状況の悪さを示しているものであるのか、岩橋千塚古墳群をはじめ紀の川流域の地域首長とヤマト政権との関係性を示すものであるのかについては、本資料を含め、慎重に検討していく必要がある。今後、岩橋千塚古墳群における象嵌文様が施された鉄刀を副葬品にもつ被葬者層を考えるうえで、当該資料及び出土古墳の検討が重要となる。

4. 鉄 鍬

鉄鍬はすべて長頸鍬とみられ、部位名称は水野2009に準じて図10のとおりとする。鉄鍬片は155点存在するが、いずれも鍬身部から茎部まで遺存する個体は確認できない。鍬身部だけの破片は7点、鍬身部から頸部にかけての破片は36点、頸部から茎部にかけての破片は41点、頸部だけの破片は32点、茎部だけの破片は46点確認できる。なお、特徴的な個体は実測し(図11～14)、その他は観察表に測定値等を示した(表2～4)。

鉄鍬の分類は、杉山 1988、水野 2009を参考とし、次のとおりとした。

鍬身部は、平面形態から両刃と片刃に大別でき、両刃は三角形式、柳葉形式の2形式に細分できる。

三角形式(1・5・8・17・21・23・24・27・29・31・90・112) 鍬身部が三角形または長三角形を呈し、鍬身関部の幅は、刃部のふくらの幅と同様またはそれ以上である。断面形は、片縞造(29)、両丸造(1・3・13・21・23・24・27)、片丸造(5・9・12・14・15・17・30・31)、平造(8)、平片刃造(4)、形状不明(90・112)に分類できる。鍬身関部の形状は、角関(1・3・4・9～

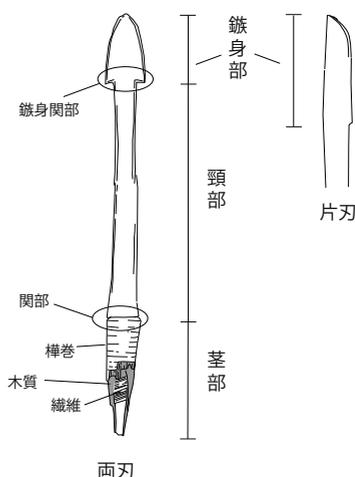


図10 鉄鍬の部位名称

14・24・31)、ナデ関(2・16・17・21・29)、山形関(5・6・15・27)、腸挟(8)、不明(23・30・90・112)である。なお、8にみられる腸挟は、ごく浅いものである。

柳葉形式(6・18~20・22・100・123) 刃部先端からふくらを有し、鍬身関部に至る線が内湾状または直線状を呈する。鍬身下半部の幅は、ふくらによる最大幅と同様またはそれ以下で、鍬身幅を超えない。断面形は、両丸造(6・22)、片丸造(18・20、100)、平造(19)、不明(123)に分類できる。鍬身関部の形状は、ナデ関(6・19)、山形関(18・20)、不明(22・100・123)である。片刃形式(25・26・28・122) 片方にのみ刃部を有する。断面形は、片丸造(25)、平片刃造(28)、両切刃造(26)、形状不明(122)に分類できる。鍬身関部の形状は、ナデ関(25・26・28)、不明(122)である。

頸部及び茎部の特徴は次のとおりである。鍬身関から茎関までが残る1は、頸部長が9.1cmを測る。平面形は、一部角関の個体(104・106・107・109・119)も存在するが、茎部にかけて撥状に開く個体がほとんどである。断面形は、不明を除き、台形(3・19・44・51-1・52・82・84・90・91)、正方形(2・51-3)、長方形(1・4・5-2・6~16・17-1・18・20・24~29・31~43・45~50・51-2・53~63・81~83・85~90・93~96・98・99)を呈する。

茎関から茎部端まで残存する個体はないが、茎部の最大残存長は7cmを測る。茎部には繊維、木質、樺巻が残存していることから、鉄鍬本体に繊維を巻き、矢柄を装着し、樺巻を施すことにより、矢柄と鉄鍬を固定している。40は、樺巻の上に漆が塗布されている。

位置づけ 当該鉄鍬の特徴について、鍬身部を形式別にみると、三角形式は、断面形が片丸造で鍬身関部が角関の個体と、断面形が両丸造で鍬身関部が角関の個体が多く、これらは三角形式の鉄鍬の約4割を占める。一方で柳葉形式は、断面形や鍬身関部の形状が多様で、まとまった特徴はみられない。片刃形式についても断面形は多様であるが、鍬身関部はナデ関が多い傾向がみられる。平面形が茎部にかけて撥状に開く個体がほとんどである。6世紀後半以降、山東22号墳などでは棘状関をもつ鉄鍬が確認されるが、当該鉄鍬に棘状関をもつ個体はない。当該鉄鍬は、すべて長頸鍬とみられることや、鍬身関部の形状、頸部の断面形から、水野 2009の編年に基づき、長頸鍬の出

鉄断面
 木質
 漆

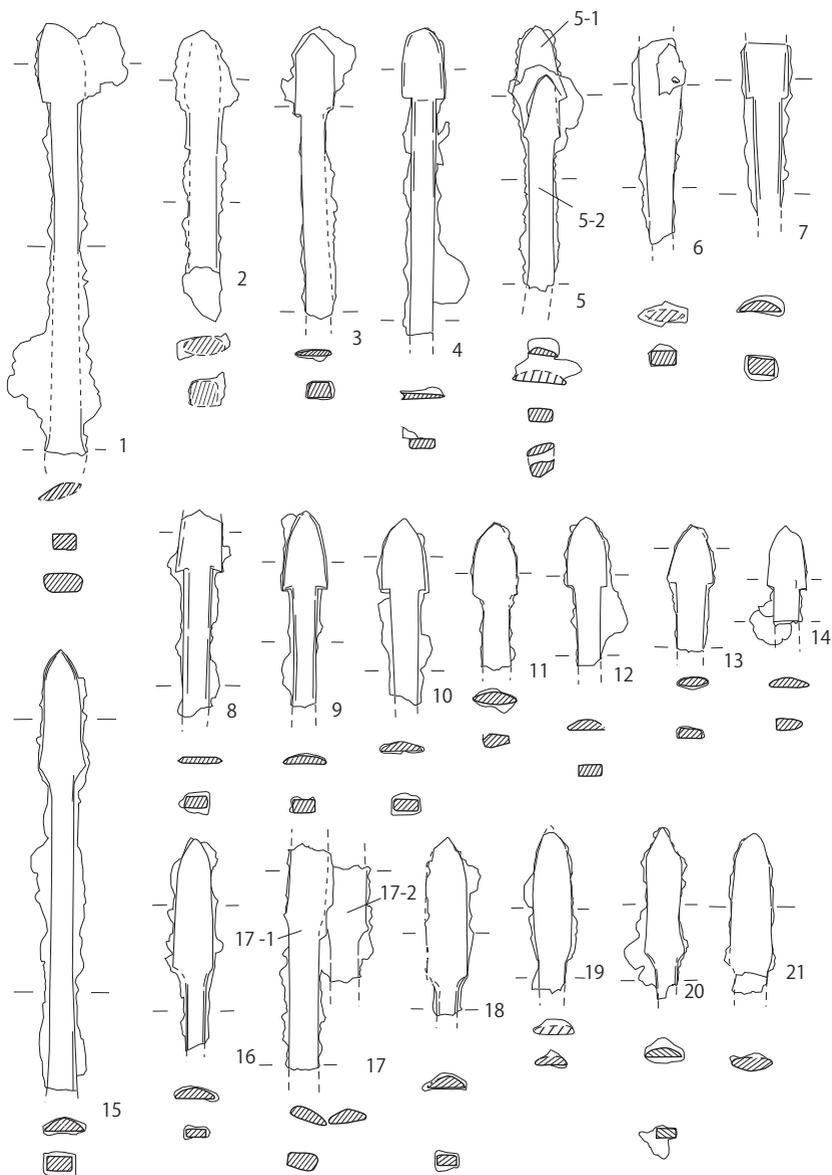


図11 鉄鏃(1~21)(S=1/2)

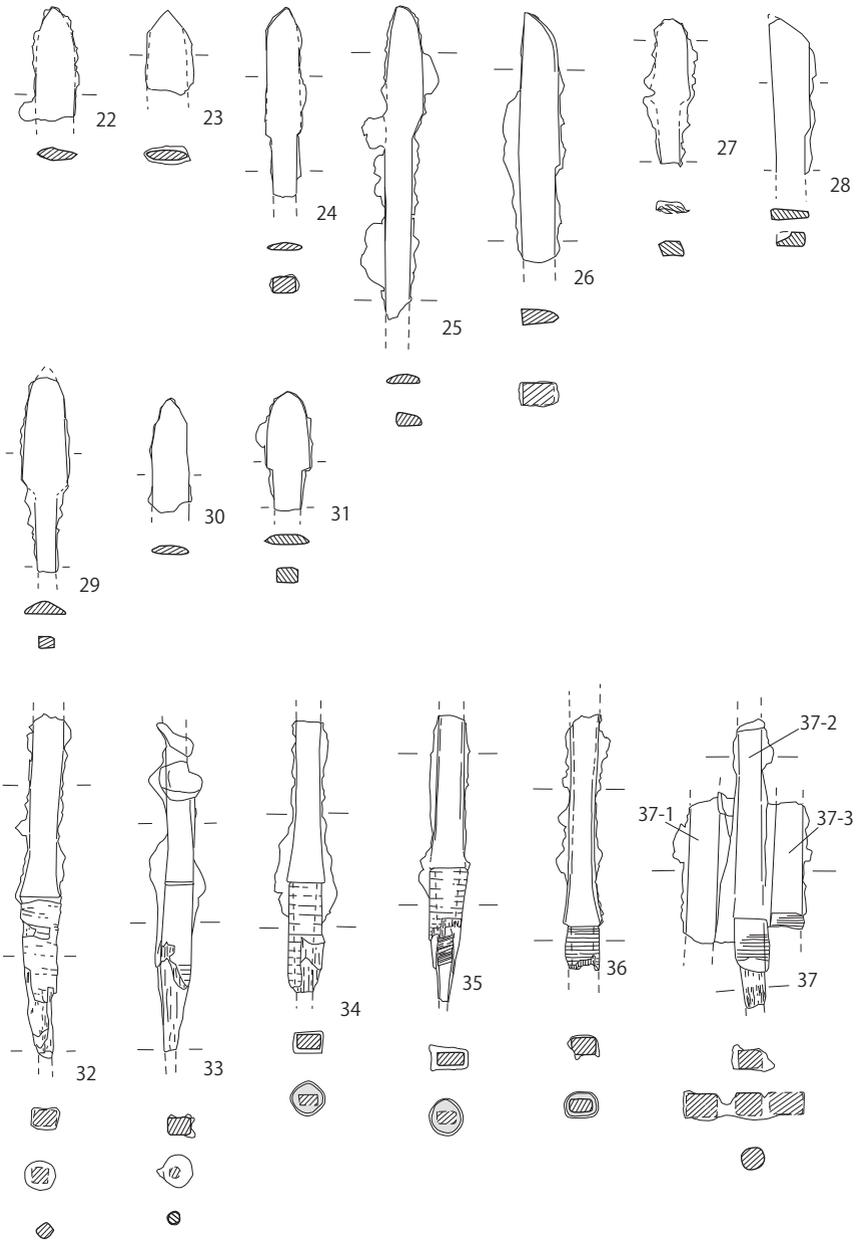


図12 鉄鏃(22~37) (S=1/2)

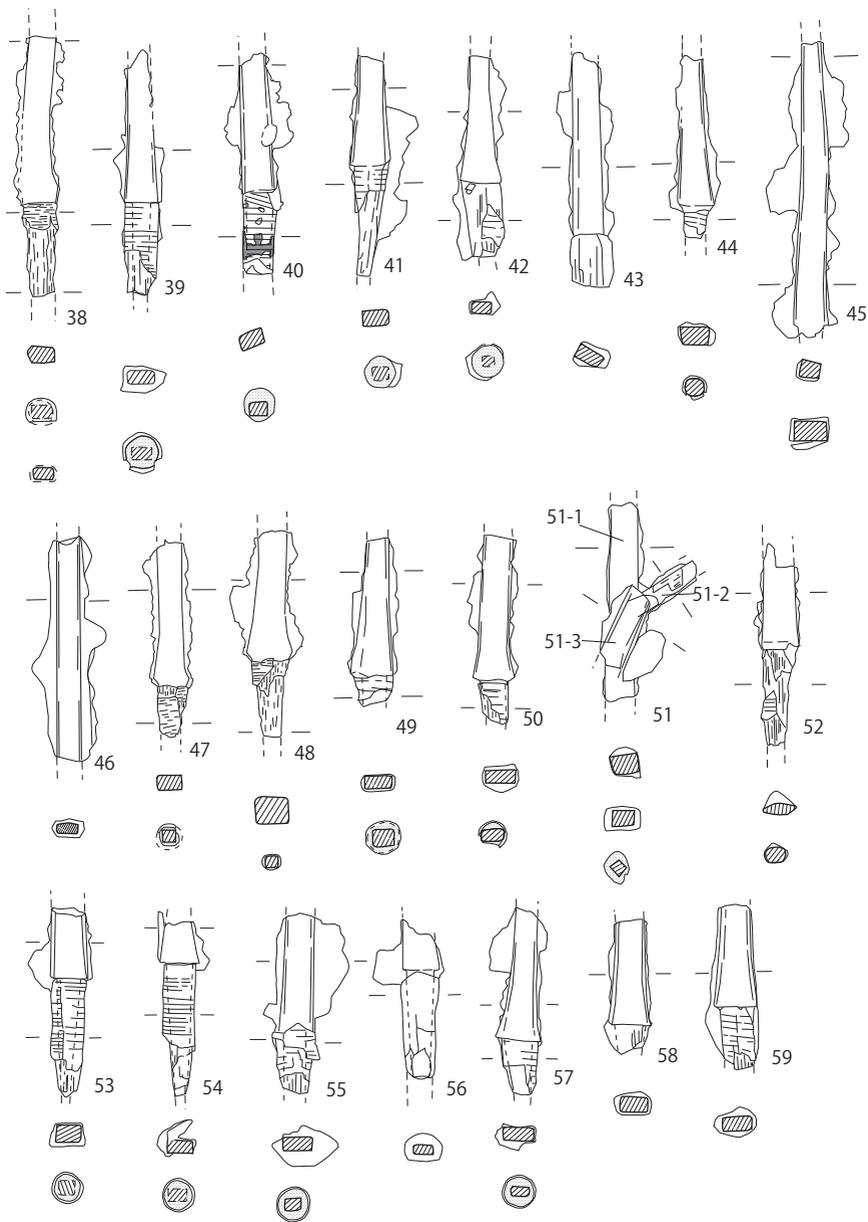


図13 鉄鏃(38~59) (S=1/2)

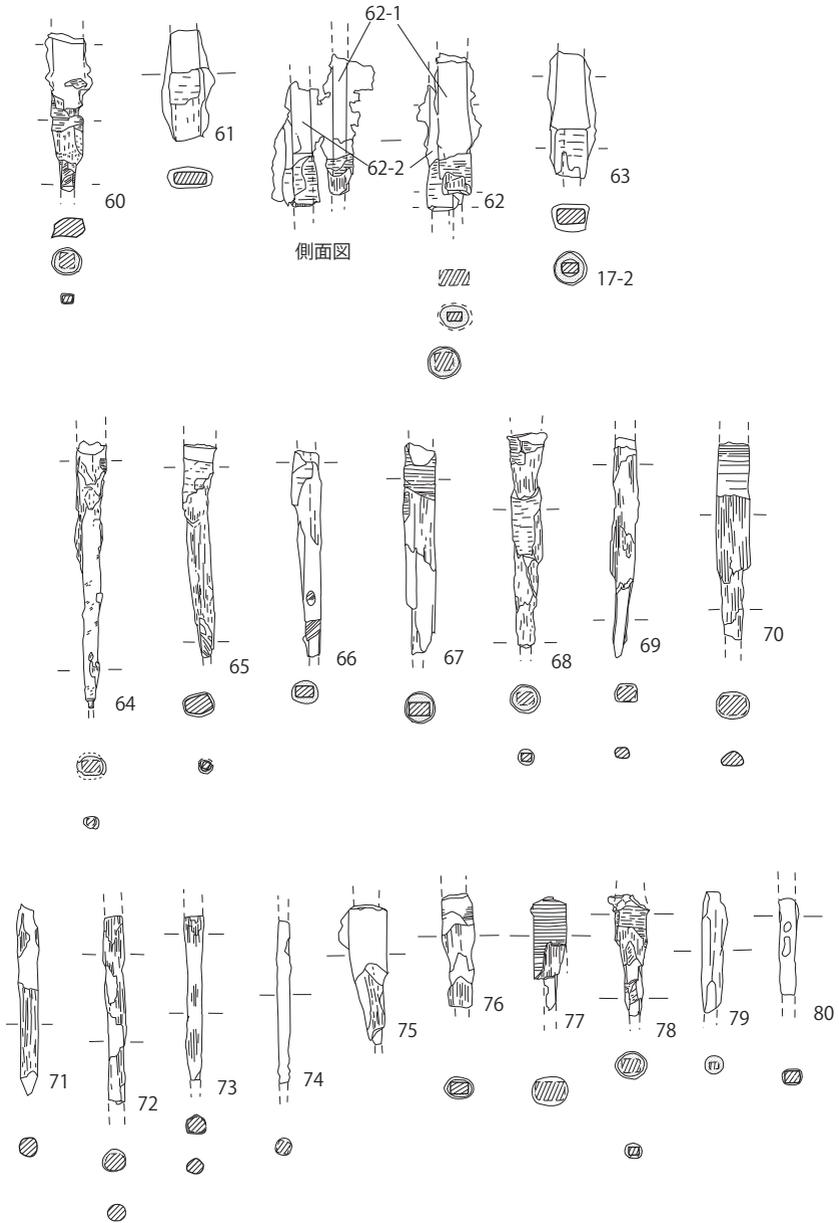


図14 鉄鏃(60~80) (S=1/2)

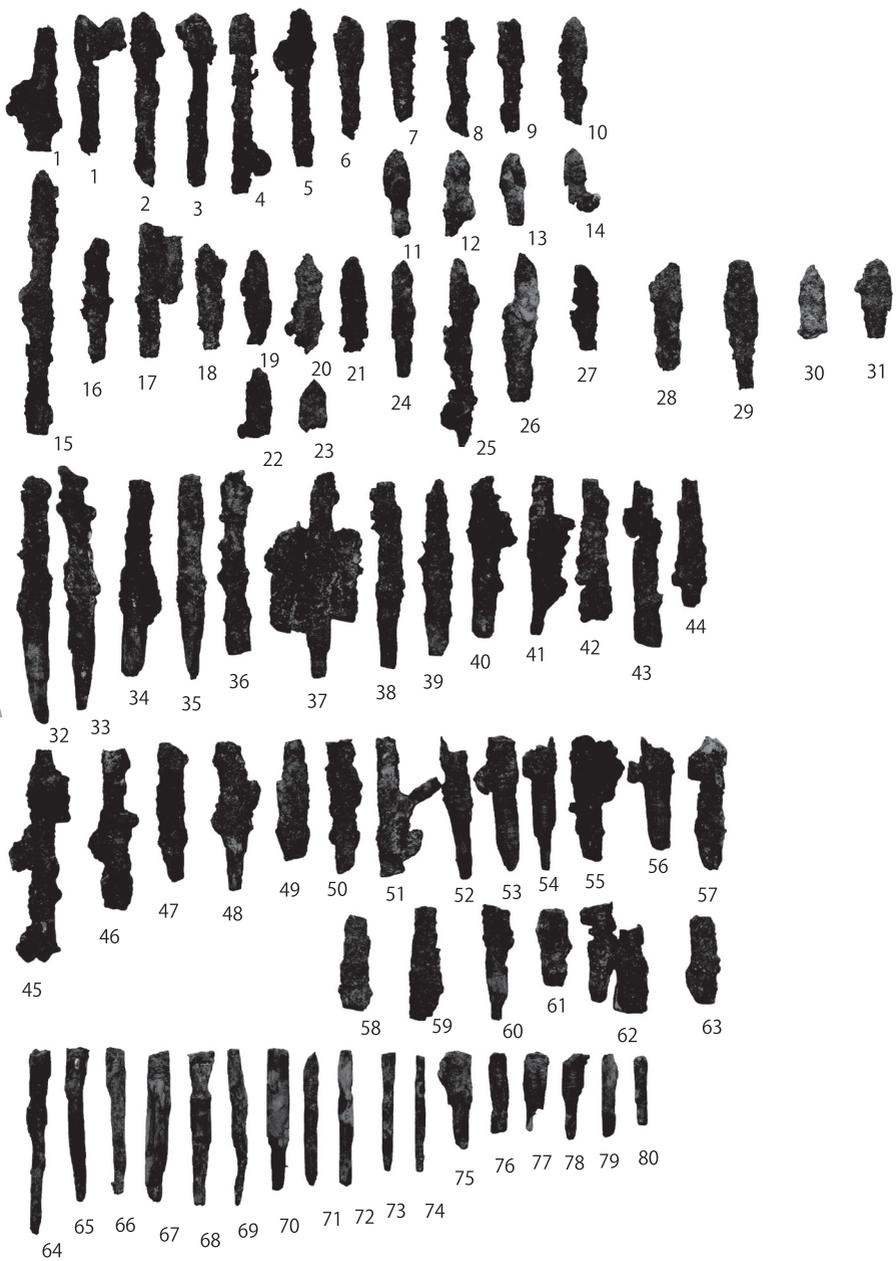


写真7 鉄鏃(1~80)



写真8 鉄鏃(81~155)

表2 鉄鍍 一覧①

番号	残存長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	部位	備考
1	11.4	1.1	0.5	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は三角形、断面形は両丸造。角間、頸部の断面形は長方形。
2	6.1	1.1	0.7	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は三角形、断面形は両丸造。ナゲ間、頸部の断面は正方形に近い。
3	7.2	0.9	0.4	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は三角形、断面形は両丸造か。角間、頸部の断面形は台形。
4	8.1	1.2	0.2	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は三角形、断面形は平片刃造か。角間、頸部の断面形は長方形。
5-1	2.6	0.8	0.4	鍍身部	平面形は三角形、断面形は片丸造。山形間。
5-2	5.6	1.4	0.4	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は三角形、断面形は片丸造。山形間、頸部の断面形は長方形。
6	5.2	1.1	0.4	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は柳葉形、断面形は両丸造。ナゲ間、頸部の断面形は長方形。鉄片付着。
7	4.6	1.1	0.5	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は不明、断面形は片丸造。角間、頸部の断面形は長方形。
8	5.4	1.1	0.3	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は三角形、断面形は平造。鬚状、頸部の断面形は長方形。
9	5.1	1.1	0.4	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は三角形、断面形は片丸造。角間、頸部の断面形は長方形。
10	4.7	1.1	0.7	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は三角形、断面形は片丸造。角間、頸部の断面形は長方形。
11	3.8	1.1	0.3	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は三角形、断面形は片丸造。角間、頸部の断面形は長方形。
12	3.9	1.0	0.3	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は三角形、断面形は片丸造。角間、頸部の断面形は長方形。
13	3.2	0.8	0.3	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は三角形、断面形は両丸造。角間、頸部の断面形は長方形。
14	2.5	1.1	0.3	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は三角形、断面形は片丸造。角間、頸部の断面形は丸みを帯びた長方形。
15	11.1	1.1	0.4	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は三角形、断面形は片丸造。山形間、頸部の断面形は長方形。
16	5.4	1.1	0.3	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は三角形、断面形は片丸造。ナゲ間、頸部の断面形は長方形。
17-1	5.9	1.1	0.5	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は三角形か、断面形は片丸造。ナゲ間、頸部の断面形は長方形。
17-2	3.1	1.2	0.4	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は三角形か、断面形は片丸造。ナゲ間。
18	4.6	1.1	0.3	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は柳葉形、断面形は片丸造。山形間、頸部の断面形は長方形。
19	4.1	1.1	0.2	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は柳葉形、断面形は平造か。ナゲ間、頸部の断面形は平らな台形。
20	4.5	1.0	0.2	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は柳葉形、断面形は片丸造。山形間、頸部の断面形は長方形。
21	3.6	1.1	0.3	鍍身部	平面形は三角形、断面形は両丸造。ナゲ間。
22	2.9	1.0	0.3	鍍身部	平面形は柳葉形か、断面形は両丸造か。鍍身間部の形状は不明。
23	2	1	0.3	鍍身部	平面形は三角形、断面形は両丸造。鍍身間部の形状は不明。
24	4.8	0.9	0.4	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は三角形、断面形は両丸造。角間、頸部の断面形は長方形。
25	8.2	0.9	0.4	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は片刃形、断面形は片丸造。ナゲ間、頸部の断面形は歪な長方形。
26	6.3	1.0	0.6	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は片刃形、断面形は両切刃造。ナゲ間、頸部の断面形は長方形。
27	3.7	0.8	0.4	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は三角形、断面形は両丸造か。山形間、頸部の断面形は長方形か。
28	4.3	1.0	0.4	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は片刃形、断面形は平片刃造か。ナゲ間、頸部の断面形は長方形。
29	5.2	1.1	0.4	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は三角形、断面形は片丸造か。ナゲ間、頸部の断面形は長方形。
30	3	1	0.2	鍍身部	鍍身部の平面形は三角形、断面形は片丸造か。鍍身間部の形状は不明。
31	3.1	1.2	0.4	鍍身部～頸部	鍍身部の平面形は三角形、断面形は片丸造。角間、頸部の断面形は長方形。
32	8.7	0.9	0.8	頸部～基部	台形間か。頸部の断面形は長方形。基部の断面形は正方形。基部には棒巻、木質残存。
33	8.6	1.4	0.4	頸部～基部	頸部の断面形は長方形。基部の断面形は円形。基部には棒巻、木質残存。
34	7.1	0.9	1	頸部～基部	台形間、頸部、基部の断面形は長方形。基部には棒巻残存。
35	7.3	0.9	1	頸部～基部	台形間、頸部、基部の断面形は長方形。基部には棒巻残存。鉄身に巻かれる木の繊維の残存状況は良好。
36	6.5	0.9	0.7	頸部～基部	頸部の断面形は長方形。台形間、基部の断面形は長方形。基部には棒巻、木質残存。
37-1	3.7	0.8	0.7	頸部	断面長方形
37-2	7.3	0.7	0.7	頸部～基部	頸部の断面は長方形。基部の断面形は円形。基部には棒巻、木質残存。
37-3	3.2	0.9	0.6	頸部～基部	頸部の断面形は長方形。基部には棒巻残存。
38	6.8	0.8	0.6	頸部～基部	頸部の断面形は長方形。台形間、基部の断面形は長方形。基部には棒巻、木質残存。
39	6.3	1.1	1.1	頸部～基部	台形間、頸部、基部の断面形は長方形。基部には棒巻残存。
40	5.8	0.8	0.8	頸部～基部	頸部、基部の断面形は長方形。基部には棒巻、木質残存。付着物あり。
41	5.9	0.8	0.4	頸部～基部	頸部の断面形は長方形。台形間、基部の断面形は長方形。基部には棒巻、木質残存。
42	5.2	0.8	0.9	頸部～基部	頸部の断面形は長方形。台形間、基部の断面形は長方形。基部には木質残存。
43	5.2	0.7	0.6	頸部～基部	頸部の断面形は長方形。基部には木質残存。
44	4.7	0.7	0.5	頸部～基部	頸部の断面形は台形。台形間、基部の断面形は丸みを帯びた長方形。基部には棒巻、木質残存。
45	7.5	0.8	0.5	頸部～基部	頸部の平面形はやや蛇行する。頸部の断面形は長方形。台形間。
46	6	0.6	0.3	頸部か	断面長方形
47	5.2	0.7	0.6	頸部～基部	頸部の断面形は長方形。台形間、頸部の断面形は正方形。基部には木質残存。
48	5.4	0.8	0.5	頸部～基部	頸部の断面形は長方形。台形間、基部の断面形は正方形。基部には棒巻、木質残存。
49	4.4	0.9	0.8	頸部～基部	頸部の断面形は長方形。台形間、基部の断面形は長方形。基部には棒巻、木質残存。
50	5	0.8	0.7	頸部～基部	頸部の断面形は長方形。台形間、基部の断面形は長方形。基部には棒巻、木質残存。
51-1	5.1	0.8	0.5	頸部	断面台形
51-2	1.2	0.6	0.4	頸部	断面長方形
51-3	1	0.4	0.4	基部	断面正方形
52	5.3	0.8	0.4	頸部～基部	斜め間か。頸部の断面形は丸みを帯びた台形。基部の断面形は丸みを帯びた台形。基部には棒巻、木質残存。
53	4.8	0.9	0.8	頸部～基部	頸部の断面は長方形だが、基部断面は正方形に近い。基部には棒巻、木質残存。
54	4.5	0.9	0.9	頸部～基部	頸部・基部断面長方形。基部には棒巻、木質残存。
55	4.8	0.9	0.9	頸部～基部	頸部、基部の断面形は長方形。基部には棒巻、木質残存。
56	4.2	1	0.8	頸部～基部	角間。基部の断面形は長方形。基部には棒巻、木質残存。
57	5	0.9	0.9	頸部～基部	頸部の断面形は長方形。台形間、基部の断面形は長方形。基部には棒巻、木質残存。
58	4	0.7	0.4	頸部～基部	頸部の断面形は長方形。台形間、基部には木質残存。
59	4.3	0.8	0.4	頸部～基部	頸部の断面形は長方形。台形間、基部には棒巻残存。
60	4	0.9	0.7	頸部～基部	頸部の断面形は長方形か。基部の断面形は正方形。基部には棒巻、木質残存。
61	3	0.9	0.3	頸部～基部	断面形は長方形。棒巻、木質残存。
62-1	3.4	0.8	0.9	頸部～基部	頸部、基部の断面形は長方形。基部には棒巻、木質残存。

和歌山大学所蔵の伝岩橋千塚古墳群出土品について (3)

表3 鉄鏃 一覧②

番号	残存長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	部位	備考
62-2	3	1	1	頸部～基部	頸部の断面形は長方形。基部には樺巻、木質残存。
63	3.3	0.9	0.9	頸部～基部	頸部の断面形は長方形。台形間。基部の断面形は長方形。基部には樺巻、木質残存。
64	6.9	0.8	0.6	基部	断面形は、頸部側は長方形だが、基部先端側は正方形。木質残存。樹皮は斜め巻きか。
65	5.4	0.8	0.7	基部	断面正方形。樺巻、木質残存。樺は横方向に巻かれるが、木質内側の樹皮は斜め方向に巻かれる。
66	5.2	0.7	0.6	基部	断面長方形。樺巻、赤漆、木質残存。木質の下に植物繊維が巻かれる。
67	5.4	0.7	0.8	基部	断面長方形。樺巻、木質残存。
68	5.7	0.8	0.8	基部	断面形は長方形。樺巻、木質残存。
69	5.6	0.6	0.5	基部	断面形は丸みを帯びた台形。木質残存。
70	5	0.9	0.7	基部	断面形は、頸部側は長方形だが、基部先端側は片丸形。樺巻、木質残存。
71	4.4	0.5	0.5	基部	断面形は円形。木質残存。
72	4.8	0.6	0.6	基部	断面形は円形。木質残存。
73	4.2	0.5	0.5	基部	断面形は円形。木質残存。
74	4.3	0.5	0.5	基部	断面形は正方形。木質残存。
75	3.7	1.1	0.5	基部	断面形は長方形。木質残存。
76	3	0.8	0.6	基部	断面形は長方形。樺巻、木質残存。
77	3	1	0.8	基部	断面形は長方形。樺巻、木質残存。
78	3.2	0.9	0.8	基部	断面形は長方形。樺巻、木質残存。木質内側の樹皮または木の繊維は斜め巻き。
79	3.1	0.5	0.4	基部	断面形は長方形。木質残存。
80	2.6	0.6	0.5	基部	断面形は長方形。木質残存。
鉄鏃 観察表(実測図未掲載分)					
番号	残存長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	部位	備考
81	5.4	1	0.8	鏃身部～頸部か	頸部断面長方形。鏃身側に見える部分は錆の可能性が高い。
82	6.3	1.5	1	鏃身部～頸部か	頸部断面台形
83	6.1	2	1.2	頸部	断面長方形
84	6.9	1.9	1.2	頸部	断面台形。平面は一部蛇行する。
85	7.4	1.1	1	頸部	断面長方形
86	5.8	1	0.9	頸部	断面長方形
87	5.3	1	1.2	頸部	断面長方形
88	5.3	1	0.9	頸部	断面長方形 有機物(木質?)付着
89	5.9	1	1	基部端か	断面長方形か。有機物付着
90	5.1	1.3	0.9	鏃身部～頸部か	鏃身部の平面形は三角形、先端を欠く。頸部断面台形か。有機物付着
91	4.3	1.3	0.8	鏃身部～頸部か	鏃身部の平面形は不明。頸部断面台形か。有機物付着
92	4.9	1.5	1	鏃身部～頸部か	鏃身部の平面形は不明。頸部断面長方形。有機物付着
93	4.5	1.3	1	頸部	断面長方形
94	4.4	1.6	1.1	頸部	断面長方形
95	4.2	0.9	0.8	頸部	断面長方形
96	4.4	1.6	0.8	頸部	断面長方形
97	4.6	1.2	0.9	頸部～基部	角閃
98	4.8	1.3	1	頸部	断面長方形
99	4.9	1	0.8	頸部	断面長方形
100	1.8(鏃身部) 2.1(頸部)	1.4/0.7	0.4/0.5	鏃身部～頸部	鏃身部の平面形は柳葉形か、断面形は片丸造。
101	3.7	0.8	0.8	頸部	—
102	4	0.7	0.5	頸部	—
103	3.9	0.9	0.4	頸部	—
104	0.8/0.7	1.0/2.6	0.6/0.4	頸部～基部	角閃
105	3.6	1	0.6	頸部	—
106	1.3/2.7	0.9/0.6	0.6/0.5	頸部～基部	角閃
107	2.3/0.9	1/0.8	0.6/0.5	頸部～基部	角閃
108	4.3	0.6	0.4	頸部	—
109	1.4/1.7	1.0/0.7	0.5/0.6	頸部～基部	角閃
110	4.1	0.7	0.4	頸部	—
111	3.2	0.6	0.5	頸部	—
112	1.7/1.4	0.3/0.7	0.4/0.5	鏃身部～頸部	鏃身部の平面形は三角形
113	3.6	0.8	0.5	頸部	—
114	3.3	0.8	0.6	頸部	—
115	3.7	0.6	0.5	頸部	—
116	4	0.6	0.3	頸部	—
117	3.8	0.5	0.4	頸部	—
118	4	0.8	0.4	頸部	—
119	1.4/2.0	0.9/0.4	0.5/0.5	頸部～基部	角閃
120	3.4	0.7	(0.4)	頸部	—
121	3.5	0.7	0.5	基部か	—
122	2.3	1	0.3	鏃身部	平面形は片刃
123	(2.3)/3.3	1.4/0.8	0.7/0.5	鏃身部と頸部	2個体誘着。鏃身部の平面形は柳葉形か。
124	3	0.7	0.6	基部	木質のみか
125	2.9	0.8	0.6	頸部	—
126	3.1	0.7	0.4	基部	—
127	5.4	0.5	0.3	頸部または基部	—

表4 鉄鏃 一覧③

番号	残存長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	部位	備考
128	5.4	0.7	0.4	頸部または茎部	—
129	3.9	0.5	0.2	茎部	—
130	3.5	0.8	0.4	頸部または茎部	—
131	3	0.7	0.4	頸部	—
132	1.2	0.9	0.3	鏃身部先端	—
133	3	(鉄)0.4	(鉄)0.3	茎部	棒巻0.8(幅)×0.6(厚)
134	3.5	0.8	0.6	茎部	棒巻0.9×0.8
135	4	0.7	0.6	茎部	棒巻0.9×0.7
136	3.5	0.6	0.5	茎部	棒巻0.9×(0.7)
137	1.4	0.4	0.3	茎部	棒巻0.7×(0.6)
138	4.6	0.6	0.4	茎部	木質(0.7×0.5)
139	2.7	0.6	0.4	茎部	木質(0.9×0.8)
140	3.6	0.4	0.3	茎部	木質(0.9×0.7)
141	4.7	0.5	0.3	茎部	木質(0.6×0.6)
142	3.5	0.4	0.4	茎部	木質(0.7×0.7)
143	3.8	0.4	0.3	茎部	木質(0.6×0.5)
144	4.8	0.3	0.3	茎部	木質(0.6×0.5)
145	3.2	0.4	0.3	茎部	木質(0.6×0.5)
146	3.3	0.3	0.3	茎部	木質(0.6×0.6)
147	2.8	0.5	0.4	茎部	木質(0.7×0.5)
148	3.7	0.3	0.3	茎部	木質(0.5×0.4)
149	2.6	0.5	0.4	茎部	木質(0.7×0.5)
150	2.4	0.3	0.2	茎部	木質(0.5×0.4)
151	3.2	0.3	0.2	茎部	木質(0.4×0.4)
152	2.1	0.3	0.3	茎部	木質(0.7×0.5)
153	2.7	0.3	0.2	茎部	木質(0.4×0.4)
154	2.3	0.3	0.3	茎部	木質(0.5×0.4)
155	2.6	0.3	0.3	茎部	木質(0.4×0.3)

現時期である5世紀後葉から、長頸鏃に台形関が増え、全体に腸袂の省略化が進み、ごく浅いものが増える6世紀中葉にかけての所産であると考えられる。

当該鉄鏃の出土古墳の階層性について検討すると、大日山35号墳(6世紀前半)は墳長105mの前方後円墳で、天王塚古墳(6世紀中葉)は墳長88mの前方後円墳である。それぞれ鉄鏃片が500点以上、700点以上と大量に出土しており、両刃、片刃ともに出土している。両墳とも岩橋千塚古墳群における首長墓と考えられている。両墳よりも規模は小さくなるが、墳長15mの円墳である大谷山6号墳(6世紀前半)からは両刃の鏃身部片が2点出土している。墳長19.6mの前方後円墳である前山A58号墳(6世紀前半)からは両刃・片刃を含む鉄鏃片が43点出土しており、副葬される鉄鏃の本数がある程度古墳の規模や階層と比例していることが分かる。このように、鉄鏃は首長墓に限らず、様々な階層の古墳からも出土するため、鉄鏃のみから出土古墳の階層性を検討することは困難であるが、当該鉄鏃には鏃身部が残存する破片が43点確認でき、まとめて出土していることは特筆できる。

5. 胡籛金具

今回整理した胡籛金具(図15)とみられる破片は計32点ある(図16・17、写真9、表5)。いずれも細片で、同じ盛矢具である靱金具の可能性も考えられるが、金具裏面に鉄鏃の茎部が付着した資料があり、鏃身部を下に向けて入れる付着の仕方から、本資料を胡籛金具と判断する。

以下に述べる資料は、金具部分の幅が約2.5cmのもの(8・13・14)と約2.0~2.3cmのもの(2・4・7・9~12・25~28)、約1.6~1.9cmのもの(1・3・5・6・23・31・32)、約1.2~1.5cmのもの(15~22・24・29・30)とに分けた。これらの資料は30・32を除き、共通して鉄製の鉾が本体部分に沿って2列に打たれている。残存している鉾が1点の資料についても、同様であると考えられる。鉾頭径は約0.4~0.5cmである。

8・13・14は幅が約2.5cmの個体である。いずれも金銅張りであり、それぞれ波状列点文が施されているのが特徴である。8には3点の鉾が残っており、裏面には胡籛の本体部分の一部と考えられる布・皮革が残存している。13は6点の鉾が打たれており、裏面に木質と布が残存しているのが確認できる。14は、鉾が4点打たれており、裏面に木質と布が残存している。

2・4・7・9~12・25~28は幅約2.0~2.3cmの個体である。2・7・9・10・12は、表面に黒漆が施されている。2には鉾が2点打たれており、表面に木質と布が付着し、裏面には木質のみが残存している。7には鉾が2点打たれており、裏面に木質が残存する。9は、4点の鉾が打たれ、表面に木質が付着する。また、10は4点の鉾が打たれており、表面に木質が付着し、裏面にも木質が残存している。12は、鉾頭が欠損し脚部が1点残っている。裏面に木質の他、布・皮革も残存している。また、4は金銅張りであり、鉾は1点打たれている。裏面には布が残存する。11について、打たれている鉾は

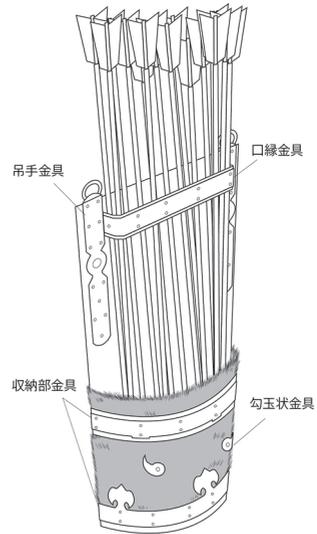


図15 胡籛金具の部位名称

2点である。裏面に木質が残存しているほか、表面には、赤漆の可能性がある漆が施される。25～28は、本体が緩やかに湾曲しており、収納部金具の可能性はある。25には鉸が2点打たれており、裏面には布・皮革が残存し、表面には赤漆の可能性のある漆が施されている。26～28はいずれも裏面に布が残存している。26に残る鉸は1点のみであるが、もう1点鉸が打たれていた跡が残る。また、27には鉸が2点、28には4点打たれている。

1・3・5・6・23・31・32は、幅約1.6～1.9cmの資料である。1には鉸が1点打たれており、裏面には布・皮革が残存している。3は2点の鉸が打たれており、裏面に木質が残存している。5は鉸頭が欠損し脚部のみが残った鉸が1点確認できる。裏面には、布・皮革が残存している。6は、鉸頭が欠損して脚部のみが残存する鉸が2点打たれ、裏面に皮革が残存している。端部の形状は丸く収まり、吊手金具の端部である可能性がある。23は、6点の鉸が打たれており、鉸頭には銀張りが施されている可能性がある。金具の縁には組紐が施されている。裏面に布・皮革が残存している。31は、鉸が1点打たれている。緩やかに湾曲しており、収納部金具の可能性はある。裏面に皮革が残存している。32は、裏面に鉄鏃の茎部が付着した個体である。鉄鏃の茎部には木質が残る。鉸の有無は不明である。また、金具本体の裏面には皮革が残存している。

15～22・24・29・30は、幅が約1.2cm～1.5cmの資料である。15・17・20・22は、金具の縁に組紐が施されている個体である。15は4点の鉸が確認できるが、その内の3点は鉸頭が欠損している。表面に、赤漆の可能性がある漆が施されており、裏面には布が残存している。17は鉸が4点打たれ、裏面に布が残存する。20は鉸が2点打たれ、裏面に布が残存している。22は鉸が3点打たれており、裏面には布が残存している。16は4点の鉸が打たれており、裏面に布が残存している。18は6点の鉸が打たれており、裏面に布が残存している。19は4点の鉸が打たれており、裏面には布が残存している。21は、鉸が3点打たれており、鉸頭は銀張りが施されている。裏面には布が残存している。24は鉸が5点打たれている。裏面に布・皮革が残存しており、表面には赤漆の可能性がある漆が施される。29は、2枚の皮革を挟んで折り曲げ、片側から4点、もう片側から2点の鉸で留めた個体である。表面には赤漆の

和歌山大学所蔵の伝岩橋千塚古墳群出土品について (3)

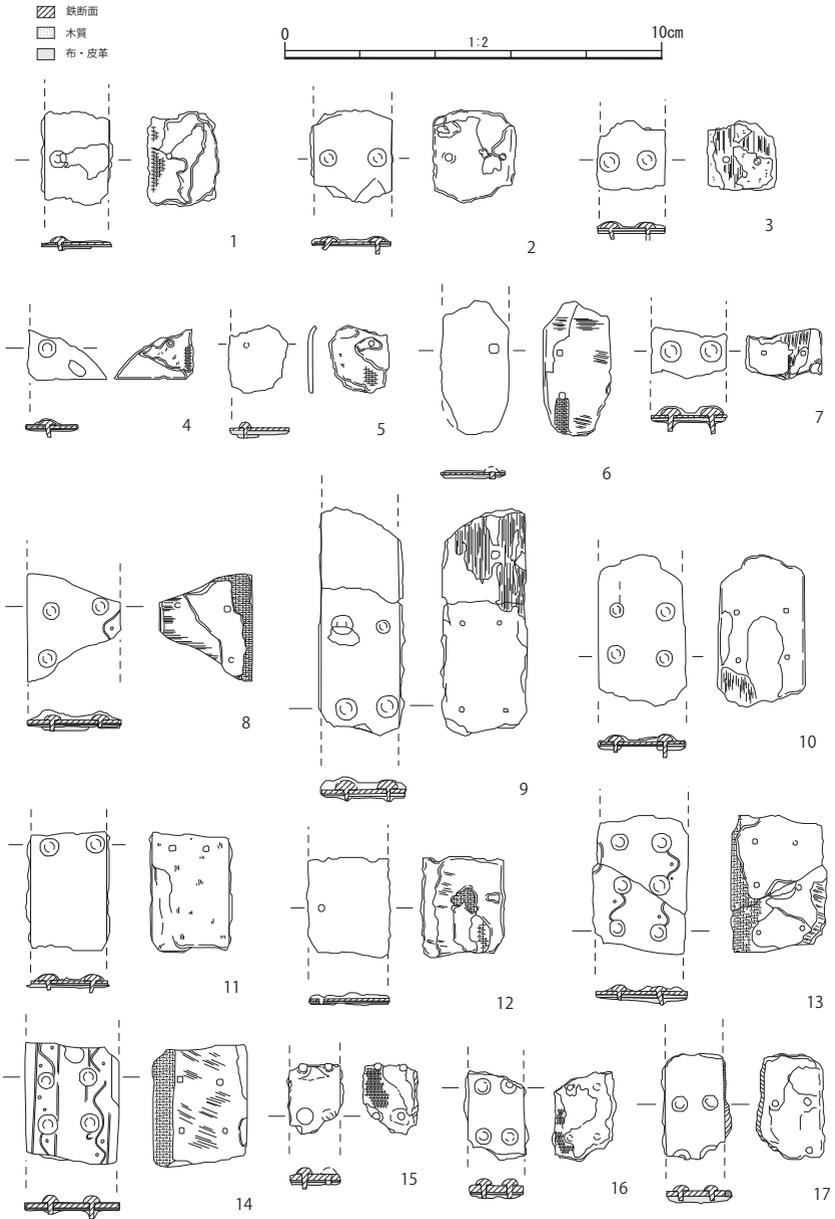


図16 胡籙金具(1~17)(S=1/2)

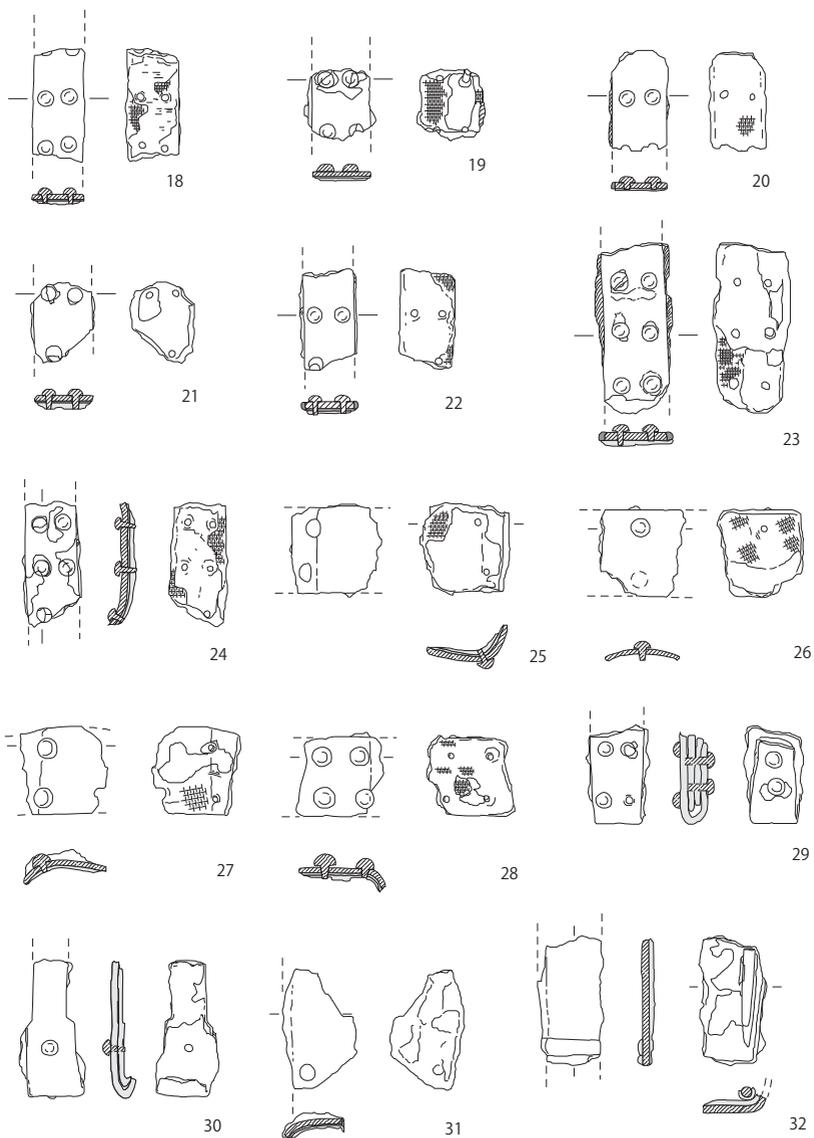


图17 胡籛金具(18~32)(S=1/2)

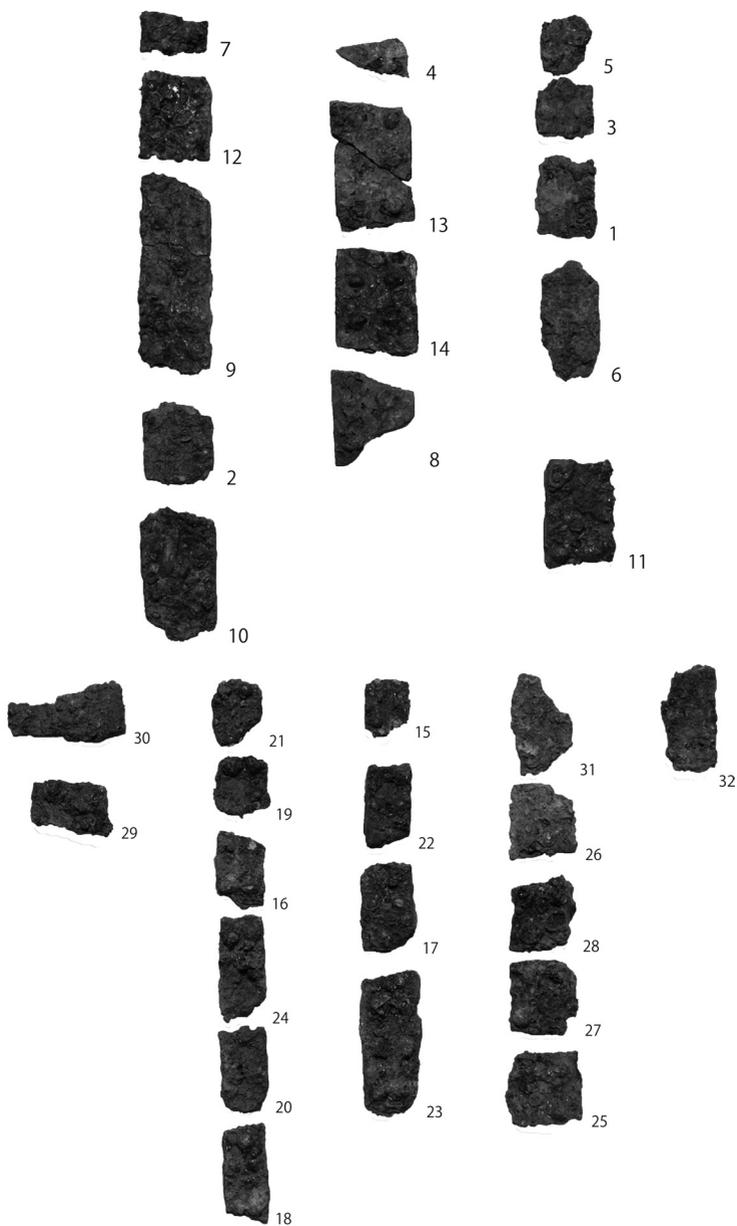


写真9 胡籙金具(1~32)

表5 胡籙金具 一覧

図版 番号	法量 (cm)						文様	漆	金銅張	組紐	備考
	残存長	残存幅	金具幅	厚さ	鋸径						
1	2.5	1.9	1.9	0.2	0.4		—	—	—		
2	2.5	2.2	2.2	0.1	0.5		—	○	—		
3	1.8	1.8	1.8	0.1	0.5		—	—	—		
4	1.3	2.1	2.1	0.1	0.5		—	—	○		
5	1.7	1.6	1.6	0.2	—		—	—	—		
6	3.5	1.8	1.8	0.2	—		—	○	—		
7	1.3	2.0	2.0	0.2	0.5		—	○	—		
8	2.4	2.5	2.5	0.2	0.4~0.5	波状列点文		○	—		
9	6.0	2.1	2.1	0.2	0.6		—	○	—		
10	4.0	2.0~2.3	2.0~2.3	0.15~0.2	0.4		—	○	—		
11	3.1	2.2	2.2	0.2	0.5		—	○	—	赤漆か	
12	2.6	2.2	2.2	0.1	—		—	○	—		
13	3.7	2.5	2.5	0.3	0.5		波状列点文	—	○		
14	3.2	2.5	2.5	0.2	0.5		波状列点文	—	○		
15	1.8	1.3	1.2	0.3	0.4		—	○	—	赤漆か	
16	2.3	1.5	1.4	0.4	0.4		—	—	—		
17	2.7	1.7	1.5	0.3	0.4		—	—	—	○	
18	2.9	1.4	1.3	0.2	0.3		—	—	—		
19	1.8	1.8	1.5	0.2	0.4		—	—	—		
20	2.6	1.6	1.4	0.2	0.4		—	—	—	○	
21	2.0	1.6	1.4	0.3	0.4		—	—	—	鋸頭は銀張	
22	2.6	1.5	1.3	0.4	0.4		—	—	—		
23	4.3	2.0	1.7	0.4	0.4		—	○	—	○ 鋸のみ銀張か、赤漆か	
24	3.2	1.5	1.5	0.5	0.4		—	○	—	赤漆か	
25	2.3	2.2	2.2	0.4	0.5		—	○	—	赤漆か	
26	2.2	2.2	2.2	0.1	0.4		—	—	—		
27	2.2	2.2	2.2	0.1	0.5		—	—	—		
28	2.2	2.0	2.0	0.2	0.5		—	—	—		
29	2.5	1.5	1.5	0.7	0.4		—	○	—	赤漆か	
30	3.5	0.9~1.5	0.9~1.5	0.5	0.4		—	—	—		
31	3.0	1.9	1.9	0.2	0.4		—	—	—		
32	3.3	1.6	1.6	0.3	—		—	—	—	約2cmの籙の莖部が付着	

可能性がある漆が施されている。30の先端はかぎ状に折り曲げられているが、途中で折れており、鋸は本体の中央に1点のみが打たれている。

位置づけ これら資料には金銅張りのものや漆塗りのものがあり、それぞれの幅等から、金銅張りのものは幅約2.0cmのものと約2.5cmのもの、漆塗りは幅約2.0cmのものと約1.5cmのものと、それぞれ2種類に分けられる。それぞれ幅が2種類ある金銅張りや漆塗りの金具を使用した1個体の胡籙であったか、金銅張りや漆塗りの金具を使用した2個体のものであった可能性

がある。岩橋千塚古墳群内では、胡籙金具の出土例は天王塚古墳、大日山35号墳(和歌山県立紀伊風土記の丘編 2015・2020)と少数であり、出土古墳として上位階層に位置付けられる。

これまでに述べてきた個体は、吊手金具や収納部金具等の一部であると考えられるが、時期を決定づける形態の金具は確認できていない。日本列島における胡籙金具について、5世紀前葉から多様な系譜を持つものが出土するが、畿内においては5世紀末葉からの出土例が増加する(土屋 2012)。また、5世紀代は青銅製の鉾が多いが、5世紀後葉からは鉄製の鉾に移行する(西岡 2007)ことから、今回の資料の時期については、5世紀末以降であると推定される。

6. 両頭金具

両頭金具は5点ある(図19-1～5・写真10)。なお、各部位名称は斎藤2017に準じ図18のとおり呼称する。両頭金具は量方から大型の1～3と小型の4・5に分けることができる。いずれも筒金の表面に木質が残存し、鉄板を丸めた際の合わせた目を確認することはできなかつた。

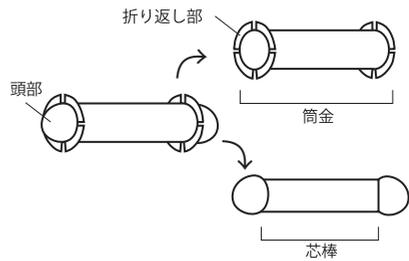


図18 両頭金具の部位名称

また、筒金両端の折り返し部は、3を除き花卉状に4つに開く形状とみられる。材質は全て鉄製で、頭部等に金や銀張りは確認できなかつた。

大型の1～3は全長3.2～3.5cm、筒金長2～2.2cmである。1・2の頭部の直径は、0.5～0.8cmでいずれも丸頭状を呈するが、このうち一方は扁平な楕円状をなす。3の頭部の直径は、0.2～0.5cmで隅丸の長方形状を呈する。1～3の筒金の厚さは0.4～0.5cmで、断面形は方形である。芯棒断面形は明確ではないが、筒金や頭部の形状からいずれも方形と推測される。

小型の4・5は全長2.4・2.65cm、筒金長1.7・1.8cmである。残存する頭部の直径は4で0.5cm、5で0.2～0.5cmで、4は丸頭状である一方、5は隅丸長方形から扁平な楕円状である。このうち5は芯棒が筒金に比してやや長く、

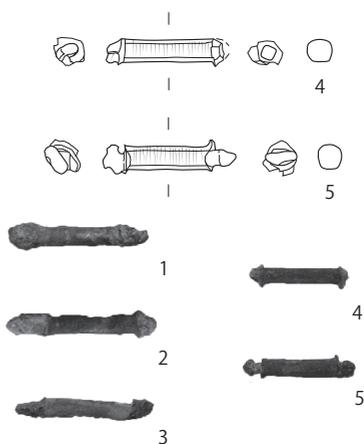
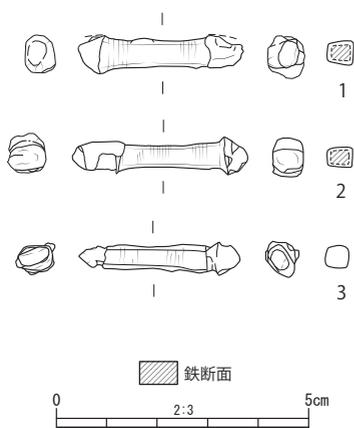


写真10 両頭金具(1~5)

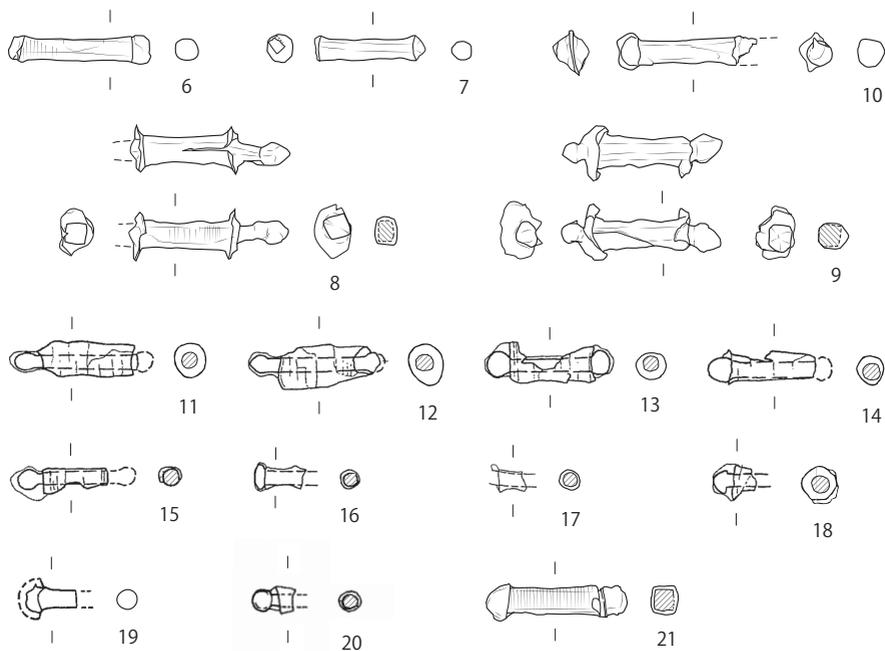


図19 両頭金具(1~21)(S=2/3)

和歌山大学所蔵の伝岩橋千塚古墳群出土品について (3)

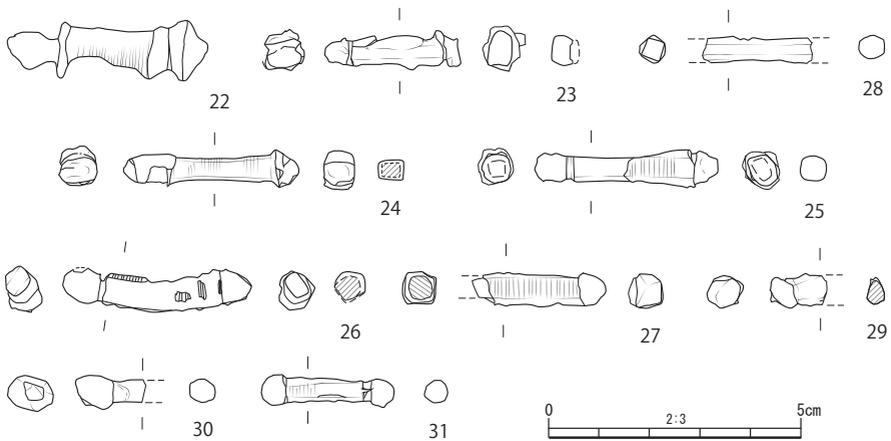


図20 両頭金具 (22~31) (S=2/3)

表6 岩橋千塚古墳群出土両頭金具 一覧

番号	古墳名	墳形	墳長 (m)	埋葬施設	時期	出土位置	法量 (cm)						芯棒断面形状	柵形断面形状	折り返し部数	共同する副葬品	備考	参考文献
							全長	筒金長	筒金厚	筒金厚 (一辺/直径)	心棒厚 (一辺)	心棒厚 (一辺)						
1	伝岩橋千塚古墳群 (伝土手形塚)	不明	不明	横穴式石室か	6世紀	不明	3.2	2	0.8	0.5	0.3	方	4	玉環、耳環、馬具、鉄刀、鉄鏃、ヤリガンナ	筒金木質付着	和歌山大学紀州経済史学文化史研究所蔵		
2							3.5	2.2	0.5	0.4	0.3	方	4					
3							3.2	2.1	0.2~0.5	0.45	不明	方	不明					
4							2.4	1.8	0.5	0.4	0.3	方	4					
5							2.65	1.7	0.2~0.5	0.45	不明	方	4					
6							2.8	2.75	0.55	0.5	不明	方	不明					
7	花山6号墳	前方後円	49	横穴式石室	6世紀初葉	石室か	(2.15)	1.9	0.5	0.35	0.3×0.4	方	不明	玉環、鉄鍔、鍔製耳飾り、金銅製金具、須臾漆、陶製土器	幅輪あり筒金木質付着	末永編1967		
8	井辺前山6号墳	前方後円	49	横穴式石室	6世紀前半	玄室内	3.15	2.1	0.45~0.5	0.6	0.3×0.4	方	2以上	須臾器、土師器、耳環、玉環、直刀、鉄鏃、鉄鍔、工具、馬具、土製筋線草	筒金木質付着	和歌山県教委1966a		
9							(2.7)	1.9	0.6	0.5	不明	方	不明					
10							(2.5)	(1.5)	0.3~0.5	0.3	0.3	方	不明					
11	大日山35号墳	前方後円	86	横穴式石室	6世紀前半	玄室内	2.6	1.2	0.3~0.5	0.3	0.3	方	不明	須臾器、玉環、直刀、甲冑、鉄鍔、馬具、胡具、馬具、胡鍔金具	筒金木質付着	筒金木質付着、漆面に黒色付着物あり	紀伊風土記の丘編2015	
12							(2.6)	1.1	0.3~0.4	0.3	0.3	方	不明					
13							(2.1)	(1.5)	0.2~0.5	0.3	0.3	方	不明					
14							(1.7)	(1.2)	0.3~0.4	0.3	0.29	方	不明					
15							(0.9)	(0.7)	不明	0.3	0.25	方	2以上					
16							(0.8)	(0.5)	不明	0.3	0.27	方	1以上					
17							(0.8)	(0.2)	0.5	0.3	0.3	方	不明					
18							(0.8)	(0.2)	0.5	0.3	0.3	方	不明					
19	天王塚古墳	前方後円	88	横穴式石室	6世紀中頃	玄室内	(1)	(0.6)	0.6	0.4	不明	丸	不明	須臾器、土師器、玉環、甲冑、鉄鍔、馬具、漆金具、漆製品他	同一個体の可能性あり筒金木質付着	紀伊風土記の丘編2020		
20	寺内18号墳 (蘇小手塚古墳)	前方後円	27	横穴式石室	6世紀中頃	前方部石室か	2.8	1.9	0.75	0.6	0.4	方	4か	不明	須臾器、鉄鍔、馬具	筒金木質付着		
22	前山B112号墳 (部長塚)	前方後円	31	横穴式石室	6世紀後半	不明	3.9	2.1	0.7~1.1	0.6	不明	不明	不明	不明	須臾器、玉環、直刀か、馬具	所在不明 遺物は図面から計測	末永編1967	
23	井辺前山32号墳	円	12	横穴式石室	6世紀後半	北方石室 羨道部	(2.7)	1.9	0.4	0.5	不明	方	2以上	須臾器、玉環、直刀、鉄鍔、馬具	筒金木質付着	和歌山県教委1966b		
24	山東22号墳	円	26~28	横穴式石室	6世紀後半	玄室内	3.5	2.15	0.5~0.8	0.5	0.3×0.35	方	不明	須臾器、耳環、玉環、直刀、鉄鏃か、鉄鍔、馬具、装飾大刀か	筒金木質付着	(財)和歌山県文化財センター1992		
25							3.6	2.4	0.4~0.6	0.5	不明	不明	不明					
26							3.65	2.4	0.5~0.6	0.6	0.4	方	不明					
27							(2.6)	(1.9)	0.6	0.65	0.4	方	不明					
28							(2.15)	(2.15)	不明	0.5	0.3	方	不明					
29							(1.1)	不明	0.4~0.5	不明	0.3~0.4	楕円状	不明					
30	(13.5)	(0.6)	0.7~0.8	0.5	0.5	多角状	不明											
31	井辺1号墳	方	36~17×29	横穴式石室	6世紀末~7世紀初葉	玄室内か	2.6	1.7	0.6	0.4	不明	不明	不明	金環、刀鞘黄金具か、不明輪状銅製品、須臾器、土師器	筒金木質付着	末永編1967		

() は残存数値

筒金と頭部に若干の隙間が認められる。筒金の断面形は4が0.4cm、5が0.45cmの方形で、芯棒の断面形は4から一辺0.3cmの方形であることがわかる。5も、同様の形状である可能性が高いとみられる。

以上のうち最も注目されるのは、弓の厚みを示す両頭金具の筒金の長さである。残存状況が良好な福島県いわき市小申田北18号墳の事例では、両頭金具が一つの弓の上端部(末弭)付近に4本、下端部(本弭)付近に1本取り付けられた状態で検出されているが、いずれも筒金の長さは1.6~2.0cmと近似する((財)いわき市教育文化事業団 1988)。一方、本稿の両頭金具は、大型と小型で最も近似するものでも0.6cmほど差があり、同一の弓に付されていたことを否定するものではないが、異なる弓に付されていた可能性も考えられる。

位置づけ 上記両頭金具5点は、いずれも出土した古墳やその状況が明らかでなく、また共伴する遺物も不明確であるため位置づけが難しい。ここでは、岩橋千塚古墳群から出土した両頭金具を集成・分析し、その位置づけについて検討を行う。岩橋千塚古墳群では、9古墳から合計26点の出土が確認される(図19-6~21・図20・表6)。これらの分析から、両頭金具が岩橋千塚古墳群に副葬される時期は、6世紀~7世紀初頭であり、法量や形態に明瞭な時期的変遷を読み取ることはできないことがわかる。むしろ、法量は古墳ごとに近似する傾向を看取でき、古墳もしくは副葬される弓ごとに規格が存在していたようである。また、出土する古墳は埋葬施設に横穴式石室もつ中上位階層に限られ、馬具等との共伴もみられる。そのため、当該両頭金具も6世紀~7世紀初頭に属し、横穴式石室をもつ中上位階層の古墳から出土したものと考えられる。

7. その他鉄製品

(1) 鉄 鉾

鉄鉾の石突部が1点出土している。残存長13.9cm、袋部の現存最大幅は2.7cmである。袋部上端は欠損しているが、上側の断面形態が円形で、明確な角がみられないことから、円筒袋式とみられる。袋部は石突の先端から少なくとも約8cm付近まで中空となり、袋部の内側には鉾の柄とみられる木質の一部が付着している。

位置づけ 岩橋千塚古墳群における鉄鉾の出土は、5世紀前半の花山42号墳、5世紀中葉の大谷山17号墳、6世紀初頭の大谷山6号墳や井辺前山6号墳、6世紀後半の山東22号墳まで長期間にわたり確認されている。一方で、現在まで、複数の武器・武具の副葬がみられる首長墓からの出土事例は確認されていない。

(2) 鉄 鉾

鉄製鉾が2点出土している。1は刃部から柄部の一部が残る。刃部先端は欠損しているが、残存刃部長3.7cm、刃幅1.1cm、刃部厚0.35cmで、柄部は断面形が方形で、幅0.6cm、厚0.45cmである。2は刃部で、残存刃部5cm、刃部幅1.1cm、刃部厚0.3cmである。いずれも刃部に錆はみられない。

位置づけ 岩橋千塚古墳群では、鉾等の工具が副葬される事例が、5世紀前半から7世紀前半までの長期間にわたり確認される。出土古墳は20m以下の小型の円墳に多いものの、大型前方後円墳である大日山35号墳や天王塚古墳でも確認されている。出土する埋葬施設の種類も横穴式石室から箱式石棺に伴う事例まであることから、岩橋千塚古墳群において、工具類は、時期や階層を問わず幅広く用いられた副葬品であったようである。

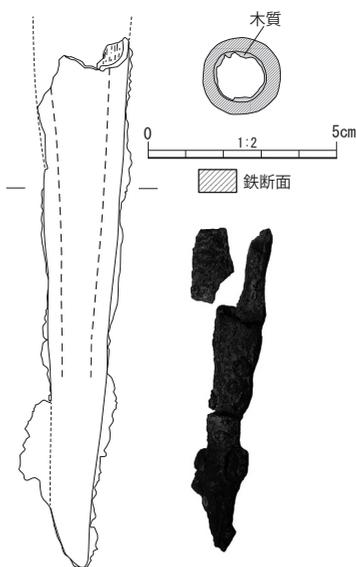


図21 鉄鉾(S=1/2)/
写真11 鉄鉾

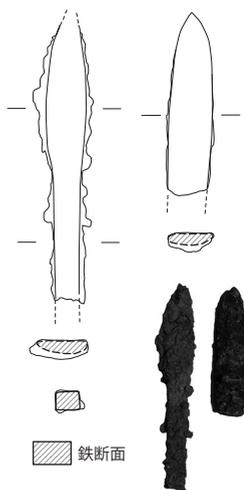


図22 鉄鉾(S=1/2)/
写真12 鉄鉾

8. 資料の来歴と出土古墳の検討

今回紹介した資料は複数の木箱に収められており、木箱の裏面に「明治三十九年五月三日 岡崎村大字小手穂山峯筋土手形塚□□(ニテ?)採集」と書かれた紙が貼られている。前号でも述べたが、和歌山大学の前身にあたる和歌山縣女子師範學校・和歌山縣立日方高等女學校郷土研究室の昭和9年(1934)の収蔵目録(和歌山縣女子師範學校・和歌山縣立日方高等女學校郷土研究室 1934)には、蒐集年が明治39年(1906)とされる「海草郡岡崎村古墳」の出土品(甕玉5点、管玉1点、金環1点、甲冑破片若干、鐵(鉄)鏃若干、鉄鏃1点、馬具破片若干)が掲載されており、これらは土手形塚出土と考えられる⁶⁾。したがって、入手時期は蒐集年の明治39年(1906)から収蔵目録発行の昭和4年(1929)の間と考えられるが、入手方法等を含めて記述された資料は確認できない⁷⁾。

明治43年(1910)の『岡崎村郷土誌』には「古墳」の章が設けられている⁸⁾。そこでは、「当地ニハ古墳極メテ多ク其最大ナルモノヲ御輿塚ト云フ、大小合セテ三十餘座アリ、・・・近年尽ク発掘シテ右形ヲ存スルモノナシ」とあり、井辺1号墳と考えられる御輿塚の記述はあるが、土手形塚には触れられていない。したがって、当時地元では土手形塚のことは知られていなかったと考えられ、学術的な発掘ではなく盗掘等によって採集され古物商等を経由して入手した遺物である可能性がある。

出土古墳については、土手形塚のことを記した資料や地元伝承もなく、和歌山大学に記録が残されていないため、「岡崎村大字小手穂山峯筋土手形塚」の貼紙が現在唯一の検討材料となる。現在、大字森小手穂はあるが大字小手穂はない。小字小手穂はあるが、現在この範囲に古墳は確認されておらず、市街地なので山峯筋を想定するような場所はない。旧小手穂村⁹⁾の範囲であれば、岩橋千塚古墳群の寺内地区東半が含まれる¹⁰⁾。大字森小手穂(旧森小手穂村)の範囲であれば、寺内地区東半に加えて井辺前山地区東半も含まれる。このように現時点では岩橋千塚古墳群の寺内地区東半あるいは井辺前山地区東半に所在する古墳であり、かつ山峯筋が示すように尾根筋にある古墳が該当すると考えられる。

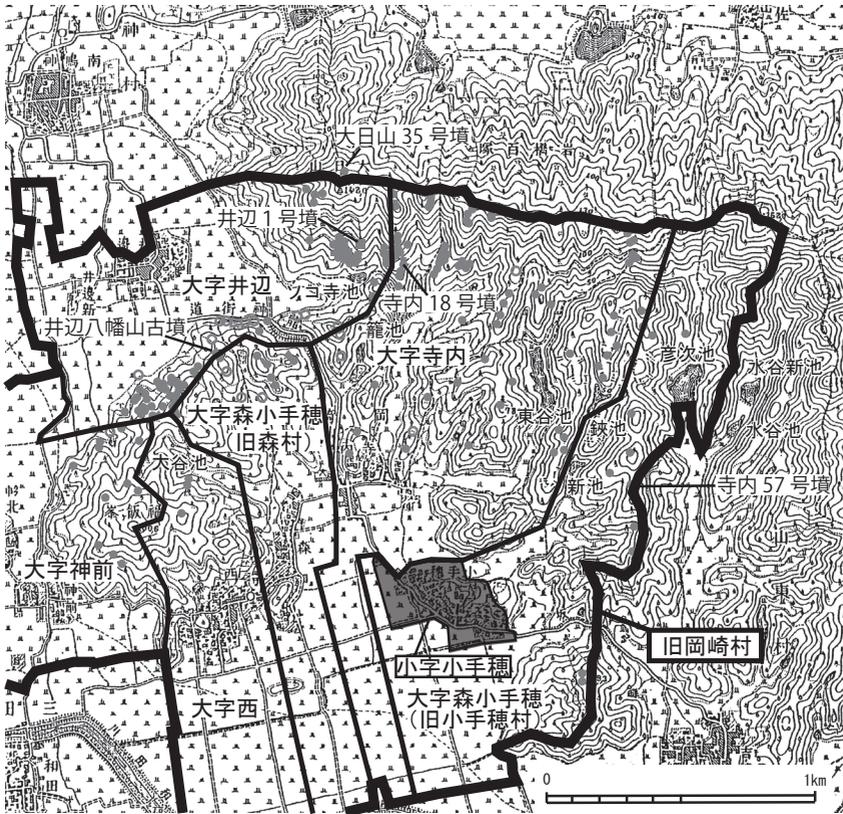


図23 旧岡崎村大字範囲図及び古墳分布図 ※古墳 (●) は旧岡崎村内のみ表示

9. まとめ

以上、和歌山大学所蔵の伝岩橋千塚古墳群土手形塚出土の鉄器について、各資料の特徴と時期及び出土古墳の位置づけについての検討を行った。

伝土手形塚出土の各遺物が示す時期は、いずれも概ね6世紀前半(TK10型式期)以降の特徴を示しており、さらに鉄鏃、金銅装馬具にみられる特徴から6世紀中葉前後(MT85型式期)であると考えられる。また、鉄刀に施された銀象嵌文様の特徴もこれに矛盾しない。

出土品のうち金銅装馬具、銀象嵌大刀、胡籙金具、両頭金具は、岩橋千塚

古墳群において階層中上位の古墳にのみ副葬される器種である(瀬谷 2016)。さらに、金銅装馬具、胡籙金具、両頭金具の特徴からこれらが複数セット存在した可能性があり、これらの器種と鉄鍬、鉄鉾、鉈を加えた副葬品が、同一古墳内から出土した一括資料であった場合、その副葬品組成から、伝土手形塚は岩橋千塚古墳群において首長墓又はそれに次ぐ有力者の古墳であったことが推定される¹¹⁾。

伝土手形塚は、字名の検討から、岩橋千塚古墳群の寺内地区東半又は井辺前山地区東半に所在する古墳、あるいは森小手穂古墳と呼ばれていた寺内18号墳が所在する寺内地区西半の古墳と考えられる。寺内地区東半では尾根筋に首長墓である寺内57号墳(直径約35~40mの円墳)が6世紀後半(TK43型式期)に築造され、それを契機に6世紀後半から7世紀前半の小型古墳の築造が活発化する。井辺前山地区東半では八幡山山頂に首長墓である井辺八幡山古墳(全長88mの前方後円墳)が6世紀前半に築造される。現在確認されている古墳の中で、字名から想定される範囲に位置し、副葬品から推定される時期及び階層が最も近い古墳は、井辺八幡山古墳(TK10型式期・6世紀前半)、寺内18号墳前方部横穴式石室(MT85型式期・6世紀中葉)、寺内57号墳(TK43型式期・6世紀後半)である。ただし、いずれも、埋葬施設や副葬品の様相が不明瞭であるため詳細な時期の検討が難しい。したがって、伝土手形塚がこれらの古墳のいずれかに該当するのか、あるいは現在未確認の別の古墳であるのかについては、現時点での資料のみでは特定するまでには至らない。

岩橋千塚古墳群においては、6世紀中葉に首長墓である天王塚古墳が築造されると、それに連動するように各地区での古墳の築造が活発化する。当該期には、大型前方後円墳にのみ副葬されていた金銅装馬具が大型円墳からも確認されるようになる。今回の検討により、これまで6世紀中葉前後の古墳の様相が明瞭ではなかった岩橋山塊の南斜面にあたる寺内地区及び南西に位置する井辺前山地区においても、首長層あるいはそれに次ぐ有力者の古墳が存在した可能性が非常に高いものとなった。

以上のように、伝土手形塚出土鉄製品の検討からは、出土古墳を特定するには至らないものの、6世紀中葉における岩橋千塚古墳群の副葬品組成のあり方や、古墳群における階層構造を考えるうえで重要な示唆を得ることがで

きた。6世紀後半になると、岩橋千塚古墳群では前方後円墳の築造が終了し、岩橋千塚古墳群周辺の紀の川流域の古墳群では埋葬施設に畿内型横穴式石室の影響が強くなる。伝土手形塚出土品からみえる6世紀中葉の有力者層の台頭は、同時に、当該期以降に顕著となるヤマト政権による地域経営の強化と地域首長の在地支配の弱体化の一端を示すものかもしれない。

本稿の作成にあたり、和歌山大学紀州経済史文化史研究所の吉村旭輝准教授には、資料調査に関して便宜を図っていただいた。末筆ながら、記して感謝の意を表します。

(1：富永、2・3・7・9：瀬谷、4：石丸・馬場、5：中西、はじめに・6：金澤、8：仲原が執筆し、全体の体裁は全員の意見をもとに金澤が編集した。)

【註】

- 1) 第1部は瀬谷今日子・仲原知之・石丸彩・富永里菜 2020「和歌山大学所蔵の伝岩橋千塚古墳群出土品について(1)－須恵器及び埴輪－」『和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要』第41号 和歌山大学紀州経済史文化史研究所、第2部は石丸彩・岩本崇・金澤舞・瀬谷今日子・仲原知之・中西瑠花・馬場彩加 2021「和歌山大学所蔵の伝岩橋千塚古墳群出土品について(2)－銅鏡及び耳環、玉類、陶質土器－」『和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要』第42号 和歌山大学紀州経済史文化史研究所である。
- 2) 前号での検討の結果、遺物の内容もほぼ一致することから伝土手形塚出土資料は、昭和9年(1934)に印刷された和歌山縣女子師範學校・和歌山縣立日方高等女學校郷土研究室の収蔵目録(以下、収蔵目録という。)の「海草郡岡崎村古墳」とされている収蔵品と判断できる(石丸ほか 2021)。したがって、本稿で紹介する資料のほか、既に報告している棗玉1～5、管玉1～3、銀製空玉1～3、水晶製丸玉1～4、水晶製算盤玉1・2、一連となっている小玉の中に少し大型の濃青色の小玉12・13・14・15、金環(図7-3)、これらも岡崎村古墳の可能性がある。
- 3) 和歌山大学から依頼を受けた龍谷大学文学部文化財科学室蛍光X線分析により、銀象嵌であることが判明した。
- 4) 和歌山市文化振興課からご教示を得た。
- 5) 後述の出土古墳の検討を参照。

- 6) この他に明治39年蒐集の記載はないが、管玉1点、丸玉9点、丸玉4点、直刀破片1点も岡崎村古墳となっている。
- 7) 明治39年当時は和歌山縣師範學校女子部であり、昭和4年(1929)に女子部が分離独立して和歌山縣女子師範學校(和歌山縣立日方高等女學校併設)となっている。なお、中村貞史氏が昭和15年(1940)の県立図書館主催の展覧会に和歌山県師範學校が出品した資料があることを明らかにしたが(中村 2021、和歌山縣立圖書館 1940)、その中に海草郡鳴神村砂子出土(鳴神貝塚・岩橋千塚古墳群花山地区周辺)の祝部土器(瓶)・縄紋土器・朝鮮式土器・弥生式土器・石斧・石鏃・石庖丁・埴輪(埴)・埴輪(甲冑破片)・貝層がある。朝鮮式土器や埴輪(甲冑破片)は前号で紹介した陶質土器と石見型埴輪の可能性があるが、岡崎村からの出土品はなく、師範學校と師範學校女子部(女子師範學校)は別々に出土品を所蔵していたと推測できる。
- 8) 和歌山大学紀州経済史文化史研究所所蔵の『岡崎村郷土誌』で確認。
- 9) 岡崎村は明治22年(1889)の町村制施行により井辺村・神前村・西村・森小手穂村・寺内村が合併して成立した。森小手穂村は明治7年(1874)に森村と小手穂村が合併して成立した。
- 10) なお、昭和38年(1963)の和歌山市・関西大学による岩橋千塚古墳群寺内18号墳(前方部石室)の発掘調査の調査ラベルには「森小手穂古墳」の記載がある(現和歌山市所蔵)。現在は岩橋千塚古墳群の寺内地区の西半に位置しているが、調査当時は森小手穂に所在する古墳であると認識されていたことがわかる。
- 11) ただし、鉄鉾及び銀象嵌大刀は、現在、岩橋千塚古墳群の首長墓からの出土は確認さ



写真13 人の歯



写真14 滑石製白玉

れていない器種である。なお、和歌山大学には、この他出土地不明であるが人歯(写真13)や滑石製白玉(写真14)が保存されている。

【引用・参考文献】

- 内山敏行 1996「古墳時代の轡と杏葉の変遷」『特別展 黄金に魅せられた倭人たち』鳥根県立八雲立つ風土記の丘
- 岡崎村 1910『岡崎村郷土誌』
- 片山健太郎 2016「古墳時代馬具における繫の基礎的研究」『史林』第99巻第6号 史学研究会
- 片山健太郎 2017「古墳時代馬具における繫の変化とその背景」『考古学研究』第64巻第3号 考古学研究会
- 斎藤大輔 2017「金鈴塚古墳と銀の弓飾り－銀製弓弭・両頭金具－」『金鈴塚古墳出土品再整理報告書』第1分冊 本文編 木更津市教育委員会
- 斎藤弘 1986「古墳時代の壺鐙の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号 古墳文化研究会 PHALANX
- (財)いわき市教育文化事業団 1988『小申田横穴群』いわき市埋蔵文化財調査報告第20冊 福島県いわき市
- (財)和歌山県文化財センター編 1992『山東22号墳－県道和歌山橋本線改良工事に伴う発掘調査概報－』
- 鳥根県立八雲立つ風土記の丘 1996『特別展 黄金に魅せられた倭人たち』
- 末永雅雄編 1967『岩橋千塚』和歌山市教育委員会
- 杉山秀宏 1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第八 吉川弘文館
- 瀬谷今日子 2016「岩橋千塚古墳群における副葬品の様相」『岩橋千塚とその時代－紀ノ川流域の古墳文化－』和歌山県立紀伊風土記の丘
- 瀧瀬芳之 2019「日本列島出土象嵌遺物集成(刀剣・銚・刀子編)」『文化財と技術』第9号 文化財と技術の研究会
- 土屋隆史 2012「日朝における胡録金具の展開」『考古学研究』第59巻第1号 考古学研究会
- 中村貞史 2021「紀伊の戦前・戦後の考古学」『紀伊考古学研究会第24回大会 紀伊の戦前・戦後の考古学 発表要旨集』紀伊考古学研究会
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1990『大和考古資料目録』第17集

- 西岡千絵 2007「日韓胡録金具考－分類と列島出土古式事例について－」『古文化談叢』第58集 九州古文化研究会
- 西山要一 1986「古墳時代の象嵌－刀装具について－」『考古學雜誌』第72巻第1号 日本考古学会
- 橋本達也 2016『えびの市 島内139号地下式横穴墓 象嵌鍛冶具の新発見』リーフレット
- 花谷浩 1996「鞍作の技術とその変遷」『畿内政権と鉄器生産』第2回鉄器文化研究会発表要旨 鉄器文化研究会
- 水野敏典 2009『古墳時代鉄鏃の変遷にみる儀仗の武装の基礎的研究』奈良県立橿原考古学研究所
- 水野敏典 2013「鉄鏃」『古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年』同成社
- 宮代栄一 1986「古墳時代雲珠・辻金具の分類と変遷」『日本古代文化研究』第3号 古墳文化研究会 PHALANX
- 宮代栄一 1996a「鞍金具と雲珠・辻金具の変遷」『特別展 黄金に魅せられた倭人たち』鳥根県立八雲立つ風土記の丘
- 宮代栄一 1996b「古墳時代の金属装鞍の研究－鉄地金銅装鞍の研究」『日本考古学』第3号 日本考古学協会
- 宮代栄一 2003「古墳時代における尻繫構造の復元－馬装が示すもの－」『HOMINIDS』Vol.3 CRA
- 和歌山県教育委員会 1966a『昭和41年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』
- 和歌山市教育委員会 1966b『和歌山県文化財学術調査報告』第一冊
- 和歌山県立紀伊風土記の丘編 2015『特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書3－大日山35号墳・前山A13号墳・前山A58号墳発掘調査報告書－』和歌山県教育委員会
- 和歌山県立紀伊風土記の丘 2019『開かれた棺－紀伊の横穴式石室と黄泉の世界』
- 和歌山県立紀伊風土記の丘編 2017『岩橋千塚古墳群－大谷山4・5・6・39号墳発掘調査報告書－』和歌山県教育委員会
- 和歌山県立紀伊風土記の丘編 2020『特別史跡 岩橋千塚古墳群－天王塚古墳 2次・3次発掘調査報告書－』和歌山県教育委員会
- 和歌山県女子師範学校・和歌山県立日方高等女学校郷土研究室 1934『収蔵目録』
- 和歌山県立図書館 1940『皇紀二千六百年紀元節奉祝 紀伊出土品展覧會目録』

和歌山市岡崎地区連合自治会 2003『和歌山市 岡崎郷土誌』

【図版・写真出典】

図1：鳥根県立八雲立つ風土記の丘 1996より転載。

図2～6：富永実測・デジタルトレース。

図7～8：瀬谷実測・デジタルトレース。

図9：瀬谷作成。

図10：馬場作成。

図11～14：石丸・金澤・瀬谷・富永・仲原・馬場実測。馬場デジタルトレース。

図15：今城塚古墳出土遺物復元品を参考に中西作成。

図16・17：富永・中西実測。中西デジタルトレース。

図18：斎藤 2017を参考に金澤作成。

図19-1～10・21：金澤実測・デジタルトレース、図19-11～18：紀伊風土記の丘編 2015より転載・一部改変、図19-19・20：紀伊風土記の丘編 2020より転載・一部改変。

図20-22：末永編 1967を金澤デジタルトレース、図20-23～31：金澤実測・デジタルトレース。

図21・22：瀬谷実測・デジタルトレース。

図23：陸地測量部(明治43年測図、大正4年製版・発行)二万分の一地図を加筆・転載。大字境は『岡崎村郷土誌』(明治43年)を基に仲原作図。

表1：瀬谷作成。

表2～4：瀬谷・石丸作成。

表5：中西作成。

表6：金澤作成。

写真1～3：富永・金澤撮影。

写真4・5・7・8・11・12：瀬谷・金澤撮影。

写真6：龍谷大学文学部文化財科撮影。

写真9：中西・金澤撮影。

写真10・13・14：金澤撮影。

